
チョメディー

タンポポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チヨメディー

【Nコード】

N8141A

【作者名】

タンポポ

【あらすじ】

高校生のコメディー小説。初めて書いたコメディーなので、完全にノリだけです。ちなみに続編があるので、気に入った方はチヨメリプ2をご覧ください。

第1話 はじめてまして、今から学校へ行くよ

心地良い朝…風になった気分だ。

俺の愛車、命名『男の機関銃』にまたがり電車に乗るため駅へと向かう。

『ブーン』

「あんた…なに口で効果音出してんのよ？」

『おわっ？なんだよ舞！人がせつかく風を感じてたのによお』

朝っぱらからやっかいな奴に会っちゃったから紹介しよう。

こいつは山下^{やました} 舞家^{まい}が隣同士で幼なじみって奴だ。

顔は可愛いんだが、性格がおてんばですぐ暴力を…

くドガッ！

……ほらね…

「そんな紹介すんじゃないわよ！勘違いされるでしょ」

ってか…心の声なのに聞こえちゃうんですね。

「大体ね自転車使う程、駅まで遠くないでしょ？」

家から駅までは歩いて二分である。

『俺はめんどくさがり屋さんなの』

「まったく、あんたはいつもそうやって…」

やばい、舞の説教が始まる！！

こいつの説教は長いからバツクれなければ…

くどがつく

「口で言うより体で…ね」

を付けるな…

腹に走る激痛を抑え、駅に向かおうとする。

チャリの後ろにはちゃっかり舞が座ってやがる…！

『舞さん…？あなたは徒歩で行くのですよ』

「口よりも体で…」

『こがせて下さい！』

…トホホ。

おっと、俺の紹介がまだだったな。名前は沖本^{おきもと} 明高^{あきじ}校二年生だ。髪型など詳しい事はストーリーに出てくると思うから期待してく

れ。

「あんたさあ…しゃべるなら」付けなよ…」

だから…聞こえちゃうんですか？

ちなみに舞とは付き合ってたんかいなぞ！

コメディーにはすぐ殴る女は付き物だろ？

たいていこうゆうのって女が実は主人公が好きで後半その想いを…

くドガッ

「それは言っちゃダメでしょ！ってか私彼氏いるから！！」

ああ、そうだったな。まあそんなストーリーにされちゃ俺は困るかな。

作者

「いや、それは分かんぞ…？ニマッ」

「……………え？」

第2話　モザイク…？あ、伏せ文字って言うんですか？

ガヤガヤとうるさい教室…やっと学校に着いた。

「よお、明！」

『おはよお、たく』

「おかしくない！？なんで俺の名前モザイク入れちゃったの！？」

『そりゃあ、お前の名前が　だし呼ぶ度に　になるからだよ…。』

「正しいよ？モザイクの位置正しいけど、心痛いから！」

『

』

「もはや何言ってるか分かんねえよ！」

朝から俺のボケに付き合ってくれているのは隣の席の吉澤よしざわ 匠親友たくみと呼べる奴だ。

まあ…こんな感じで今日も始まるわけだ。

チャイムと共に先生が入ってきた。

先生は俺を見るなり

「明！貴様あゝ！なぜ茶髪を直して来ないんだあゝ！しかもサラサ

ラの長髪にピアスまで開けて整った顔立ちは母親譲りかあゝ！」

と怒り狂っている。

…あ、今いい感じに俺の事伝わったんじゃない？

イエーイ

…なんて言ってる場合じゃない。先生の教科書が赤く光りだしたぞ
！！

「心の力が溜まった…くらええええ！バオウ・ザケ…」

いやいやいや、パクリだからそれ！

「せい！！」

投げてきやがった！

くう…突っ込むのに必死で回避できなかった…。

教科書の角が頭にぶつかりリアルに痛い。

「明…マズイぞ！ぶつとび率がもう200%を越えた！」

スマ ラですか…？

「しゃあああ！あいつ飛び頃だぞ！」

「もらったあああ！」

「結局、ドンーは使えないんだああ！」

って、このクラスおかしいだろ！

しかも最後の奴の主張は使う人次第だから！！

「止めてください明さん！あれを使ったら…俺達まで…」

何キャラですか、匠さん。僕はそんな技もってませんよ？

「まあまあ、許してやりなさい」

急に先生が優しくなだめた！！

「……はい、ゴーさん」「」

その番組もう終わったから！！

「お前、ツッコミだかボケだか分かんねえよ」

新キャラが出てくるまでずっと二役は疲れるな…。

第3話　高校三年生に設定しないで本当に良かったと思った瞬間

暇…ひま…ヒマ…H I M Aだぁー！！

授業中って本当に暇だよなぁ。

何か面白い事でも起きないかなぁ…。

例えば、いきなり匠が死ぬとか、いきなり匠が血い吐くとか、極限状態まで追い詰められた二人は永遠に結ばれるとか、いきなり匠が死ぬとか…

「いや、ひどいから！ってか何気に俺が死ぬ二回使ってるからね！」

『匠、お前のツツコミ…ツマンねえな…』

「…ガンー！！」

あらら、匠が真面目に落ち込んだぞ。

『悪かったな。じゃあ俺がツツコミやってやるから匠がボケてみな？』

「うん！僕ボケるー！！」

…匠って実はウザいキャラだったんだな。知らなかったよ。

よぉーし、徹底的にイジメ…いや、つつこんでやる！

「　！オラ匠　」

『変顔か！』

パチーンと音が鳴り響く。

「違くね！？顔関係ないよね？ほら…オスが　になつてて…」

『変顔か！』

パチーンと音が鳴り響く。

「分かった分かった！ゴメン！降参降参！俺にギャグは向いてないよ」

『お前高二だから』

パチーンと音が鳴り響く。

「え…？ツツコミ本気過ぎない？ってかボケてないから！降参だつて…」

『お前高二だから』

パチーンと音が鳴り響く。

「ちよつと…変換し間違えた事から偶然生まれただけだから！高三じゃなくて降参だから！」

『お前高二だから』

パチーン…

このやりとりが一時間続いた。

匠の腫れぼったいホッペタを見て俺はツッコミをやるつと決意した。

第4話　ひょっとして、もしかして、あの子って、カフェラッテ

『ああ〜マヂでヒマ〜』

「あなた…前回散々人の頬ひっぱたいと言っ事はそれですか？」

『鏡餅か！』

〜ペエン〜

ふーん、人の頬って叩き過ぎるとパチーンからペエンになるんだあ

「辞めようよもう…」

『だってお前それはマヂで鏡餅だぜ？』

両方の頬の色が赤を通り越して紫色になり腫れ上がっている。

「明のツッコミやだよ…」

『勘違いするなよ匠！俺は匠だからこそ叩いているんだ！もっと面白いボケの奴がいたら叩いたりせずに笑いに変えるさ』

「重く酷いな…」

はあ〜ボケが面白い転校生でも来ないかなあ…。

「ええ〜、ここで転校生を紹介する。入りたまえ。」

タイミング良ッ！

「今日から転入してきました 鎌田 友美（かまた とみです。」「可愛いー。ええ女やあ。おじさん惚れちまったよ！

黒く輝いたストレートにパツチリした目。白い肌。身長は二人でベンチとかに座って首を俺の肩にゴロンってなったらちょうど良さそうなくらいだ

「ええ〜これで三人目のクラスメイトだ。仲良くするように」

少なッ！

今まで匠しかいなかったのこのクラス！？

…え？じゃあ第二話でスマブ 風に襲ってきた人達だれ！？

「目で見るのではない…。感じるのだ」

何言い出すの先生！？

「…母さん」

おい匠、何もないとこ見て手え振るなよ！

ってかお前の母さんまだ生きてるだろ！

『戻って来ーい！匠い〜』

くポワァーンく

こいつの頬つぺたどんな効果音だよ！

叩いたら和んじやたよ！

「じゃく友美ちゃん。鏡餅の隣の席に座ってくれ」

先生まで匠の事、鏡餅って言っちゃってるし。

「よろしくね、鏡餅さん」

……俺の隣きたく！

『間違ってるから！明らかに鏡餅は匠だろ！俺の頬つぺた腫れてないよ？』

「……！！鏡餅じゃ……ない？」

そんなショックなんだ！？

ってかこの子もしや天然さんなのか？

TENNENSANなのかあく！？

第5話　自然と僕はツツコミ役になってきましたね

「さあてそれでは授業を始めろぞ。委員長、号令を」

いや、三人しかいないクラスに委員長も何も…

「起立！」

いた！！

ってか人数めっちゃ増えてんじゃん！！

ス　ブラ風の奴らも帰ってきたのね…。

「礼！！」

く　ペコツく

「着陸！！」

く　プシュウウく

…　やっぱこのクラスおかしいね。

「転入したばかりでさっそくだか…友美、教科書に書いてある文字…読めるか？」

馬鹿にしすぎだろこの先生！！

いくら友美ちゃんが天然でも…

「…読めません」

読めないんだ。君高校生？

「あ…でも、この光ってる文字だけなら読めます。えっと…ザケ」

それ魔本だろ！

ってかパクりすぎだから！

「ゴメンゴメン、それ先生の魔本だった」

ええ、先生もしやスゴい人なの！？

「今日の所はすまないが、明！教科書を貸してやりなさい」

『あ、はいよ』

友美ちゃんに教科書を渡す。その時に偶然にも手と手が触れ合った。

『お…』

なんだか意識してまうなあ、おい。

「サンクス、鏡餅さん」

古いなサンクス！

ってか鏡餅は俺じゃないから!!

「それじゃ32ページに書いてある文を読んでくれ」

あ…ヤベっ。

今英語の授業なのに国語の教科書渡しちゃったよ!

どうしようしょ…

「テープは嫌い」

読み始めちゃったよ!

つうかなんだその題名!!

「私はテープは嫌い…物と物をくつつけるまでは良い。

でもこれを人間に例えると、好きな子同士をくつつけようと協力する人…そいつがテープ。

くつついた後…離れた時…テープはどっちかにくつついてるでしょ?

付き合った後…別れた時…そいつは好きだった人と付き合い合ってませんか?

私はテープが嫌いだ…」

…悲しいなこの国語！！

きつと書いた人、協力してもらってた人に付き合ってた子を奪われちゃったんだな。

ってか今英語の授業だから！

今に先生からツツコミが…

「素晴らしい…」

ええー！！

「英文を訳してくれたんだな」

違っただろそれ！

こんな文章英語の教科書に載らないから！

「先生なあ…英語嫌いなんだよ…。だってここは日本じゃないか」

お前英語の教師だろ！

そんな英語嫌いの生徒が言うような事言ってるなよ！

「先生なあ…映画監督になりたかったんだ」

語り出しちゃったよ！

授業やれよ！！

「その時初めて作ろうとしたのが…テープは嫌いだったなあ」

先生が書いたんだこれ！

「…先生」

辞めようぜ！

クラス全体がしんみりな空気になるの辞めようぜ！！

「レンタルショップで借りて見る事！今週の宿題だぞ」

映画化されてたー！

「ねえ、明さん。今日の帰りにいつしよに見ませんか？」

マジですか！？

友美ちゃんからデートの誘いが！

つてか俺の事、鏡餅じゃないって認めてくれたんだ。

『僕、映画大好きい』

反応が匠とかぶってしまった…。

今回はドキドキのデートだよ

第6話　DUD見てバイバイ　本当だよ？ワタシ、ナニモシテマセーン

～ウィーン～

自動ドアが開き店内に足を踏み入れる。

暑かった外に比べれば店内はもはや極楽だ。

そして隣には友美ちゃんが

そう、俺は先生が作った（本当だろうか…？）映画を見るために来たのだ。

言い忘れたが、先生の名前は山崎という英語教師であり、俺のクラスを担当である。

『えーと…なんてコーナーにあるのかな』

「あ！あれじゃないですか？」

友美ちゃんが指差したコーナーには

『山崎先生コーナー』

と書かれた看板：

まんまやん！！

棚に『テープは嫌い』が並んでいる。

しかし、10本もありながら1本も借りられてなかった。

先生…売れてないなあ。だから俺達に宿題とか言って借りさせようとしたのかよ…。

他にどんなのがあるのかとしてみる。

『英語教師〜ここは日本じゃないか編〜』

これも！？

これも映画化されてんの？

『英語教師〜魔本を手にした男編〜』

これ個人的にはすごい見てみたい気がする。

『英語教師〜女子高生を見ていたら…後編〜』

見ていたら何！？

つてか後編って何だよ！！

前編ねえじゃん！！

『鏡餅と呼ばれた男』

これ匠だろ！！

ってかこれだけめっちゃ借りられてんじゃん！！

「あ！これ見たあゝい」

友美ちゃんが興味を持ったDVDを見てみると

『英語教師ゝ明、ウチら…会ったびいっつもケンカやね編ゝ』

いやいやいやいや！！

なんかもお全部がおかしくね！？

確かに先生の言う事は聞かねえけどさ…

ってか先生になってからも映画作ってたの！？

結局俺達は『デスノー』を借りていっしょに見る事にした エヘヘ

先生には人気ありすぎて全部レンタルされてましたよゝって言うてあげようと思う。

第7話くやつと新キャラが出てきましたが場繋ぎのため二度目の登場は難しい

「本当か…？」

『なんだよ匠。朝っぱらから顔近いつて！』

「第6話の題名…本当なんだな？」

『第6話の題名？いきなら何言い出すのこいつ』

「とぼけんな！お前友美ちゃんに何しやがった！」

あゝ嫌だねえ、モテない男は。

『…フツ』

「フツじゃねえよ！俺なんか昨日一人で鏡餅と呼ばれた男を見てたんだかな！」

こいつ見ちゃったんだ！

「マジ泣けるよおゝ感動したよ…主人公に会ってみてえよ！」

感動系なんだ！！

つてか鏡餅つてお前だよ？

「匠も見たんだ？私も見たんだけど…あれは泣けるわあゝ」

俺と匠の会話にいきなり入ってきたのは…知らん！

誰だこいつ！？

「なんだよ明、知らないのか？同じクラスの正美まさみだよ」

「ウチの事知らないとかマジショックで意味がプなのれすケロ」

うぜえこいつ！

意味がプってなんだよ！

今はやりのギャルって奴ですかね？

金髪に日サロ行きまくりの肌に超短いスカート。携帯にはストラップやらが大量に付いている。

なんでこいつは山崎に注意されないんだろ？

「んでさあゝタクミン」

タクミン！？

匠の事ですか！？

って事は僕はアキラン？

テヘッ

「明なんかほつといて、鏡餅になった男！マジヤバイよねえ」

俺の呼び名はそのまんまかい！

「ああ、特にクライマックスのシーンで男の頭にみかんが乗る所なんか涙止まんなかったよ」

それで涙出るの！？

ってかなんだそのクライマックス！！

「マジあの主人公に会ってみたいって感じたケロ」

正美の語尾うぜえ……。

ってか主人公のモデルになった奴が目の前にいるから！

「おはよー明 昨日マジ意味がプだったけど楽ピカチューだったケロ」

友美ちゃん、ギャル語うつってるから！

仲良く二人でしゃべっていると背後に殺気大オーラを感じた。

「許さん…俺は許さんぞー。コメディーに恋愛を持ち込んだじゃあいけないなあ」

「そうだケロ」

『うつせえ、匠！てめえはゲロゲロとヨロシクやってる！』

俺は偶然にも持っていたミカンを匠の頭に乗せ、合掌した後、全身全霊の握力でミカンを握り潰してやった。

ミカンの汁が垂れて目に入ったのか、匠は叫び、もがいていたが俺には関係ない。

そう、弱者は捨てるのだ。

俺は友美ちゃんと誰にも邪魔されない屋上へと向かった。

第8話、今回のテーマは真面目です（前書き）

題名通り、一切笑い無しです…

第8話　今回のテーマは真面目です

　　ガチャ

「いい天気…」

俺と友美ちゃんは屋上に来ていた。…二人っきりで。

フェンスの向こう側では部活の朝練や、今から登校してくる生徒が見える。

俺は腰を下ろし、友美ちゃんはフェンスに肘をかけて立っている。

もつと体制を低くして風が吹けばあわよくば…という感じだが、今回のテーマ『真面目』である。

『最近どうよ?』

俺は友美ちゃんに話し掛ける。

「うーん…」

会話はここで途切れる。

しばしの沈黙。これを先に破るのは友美ちゃん。

「やっぱり…どっちも疲れちゃった」

匠…ゴメン。第6話の題名、実は嘘なんだ。

くデスノー 終了く

「あゝ面白かった。山崎先生には悪いけど、映画はこっぴどなきやね」

『あ…あぁ』

普通…だよな？

DVDを見終わった後…俺はある違和感に気付いた。

なんだろう…決定づけるものはないんだけど。

友美ちゃんって本当に天然なのか？

俺と二人の時とクラスにいる時じゃ人格そのものが違って感じた。

まあ、会った初日でこつ言つのも変なんだけどね。

無理して過去を隠す…っていうのかな？

とにかく俺はそう感じて友美ちゃんにこつ問い掛けたんだ。

『なんで転校してきたの？家庭の事情とか？』

そしたら友美ちゃんは急に淋しそうな顔で

「逃げてきたの…」

って言われたからオジサンもう参ったよ。

「私は前の学校でイジメられてたの。たぶん理由は真面目過ぎる所…。」

だからこの学校ではそんなイメージ作らない様にしてただけど…
明にはバレちゃってるよね？」

最初は信じられなかったよ。こんなに可愛い子がイジメられるんだ
ぜ？

「…親は？」

「都内の高校へ通うって無理言って、今は近くのアパートで一人暮らしなの。仕送りは毎月くるけどね」

「…辛くない？」

「全然！もう泣かないって決めたんだもん。弱い自分は嫌いなもの。
泣くって事は弱いって事だから…私は」

友美ちゃんはここまで言って口を閉じた。

俺は友美ちゃんをじっと見つめる。しかし、この目は自分で驚く程
の冷たい眼差しだろう。

友美ちゃんも先ほどまでの、おちゃらけた俺の雰囲気が変わった事に
気付いた様だ。

『…弱いな』

予想外の言葉が出てきたのだろうか友美ちゃんは

「え？」

って顔をしている。

『強さってのは涙を我慢する事じゃない』

俺の言葉に打って変わって今度は怒った様な友美ちゃんの表情。

「…じゃあ、強さって何よ」

『それは…俺にも分からない。』

「…ゴメン」

『いや、俺の方こそゴメン。…でも』

何か言いたかったがどうすれば伝わるかが分からなくて何も言えなかった。

「今日は帰るね。楽しかったよ」

『あ、うん』

と言う感じだった。

く屋上のシーンに戻りますく

「家に帰った後、たくさん泣いた。でも私、決めたよ！もう逃げないから。友美らしく生きていくの」

『そうだな…。それが良い』

誰にだって弱い部分も嫌いな一面もある。

でも誰にだって、ちょっと自分が好きになったりする事がある。

それと仲間達がいる！

「これからも…みんな私と仲良くしてくれるかな？」

『水は入れ物で形が変わる。人は友達で人格が変わる。』

友美ちゃん、俺達という限りコメディーに巻き込まれてもらうから覚悟しろよ！』

「…うん」

そうして友美ちゃんの過去も無事に解決（したのか？）。

俺達は教室に戻って行った。

第8話〜今回のテーマは真面目です〜（後書き）

コメントなさい、次回からちゃんとコメディーやります

第9話　夏休みだもん、ハジけましようよ

『もおテンションMAXだぁー！何？何これ？周りはビキニのお姉様だらけじゃないですか！』

「海だ海だ！さっそく泳ごうぜ、明！」

『待ちたまえ匠君。それより先に、拝まなくてはならないものがあるのでは？』

「おっと忘れてましたよ隊長！」

「「「お待たせえ」」」

『ん　夏は良いですな』

「ちよつと…明！変な目で見ないでよ！」

くドス

うん。久しぶりの鉄拳だ。

もう夏休みに入いわせった事だし、俺、匠、舞、正美、友美ちゃん…あと舞の彼氏の岩瀬りょーた 亮太の男女六人で海に来ている。

しかし、ムフフですな。皆様の水着姿…たまりませんなあ。

「まあ、私まで誘ってくれたのは嬉しいから許すけど」

もう殴ってますよ、舞さん。

『リョータ…だよな？まあ、ヨロシクな。新キャラなりに俺にイジられてもらっぞ？』

「…ケツ」

リョータ君、無愛想お〜。

そんな態度だと

『ちよつと舞さん！リョータったら女の子が着替えてる間に

「今なら舞がないから好きな事しほうだい触り放題だぁ　ホホホ
オイ」

とか言ってナンパしましたよ？』

と舞に耳打ちしてあげた。

くドスンく

効果音が強くなりましたね。しかも殴られたの僕ですか？

「リョータはそんな事しないわよ！」

リョータって奴、よくこの暴力女と付き合えてるな。

「みなさん、パラソルとシートひきましたよ」

さすが友美ちゃん、気がきくね

「日焼けオイルあるから焼きたかったらウチと焼くケロ」

だまれゲロゲロ、とつとと平泳ぎしてこい。

「それにしても暑いわね…明、ラムネ買ってきて」

それは彼氏であるリョータに頼みなさい、舞さん。

つてか…どうも俺と舞がしゃべる度にリョータに睨まれるんだよなあ。

もしかしてこいつ妬いてんのか？

まあいいや、とりあえず遊ば。

「砂風呂やりたいケロ」

『じゃあ、匠でも埋めるか』

「なぜ俺！？ちょ…待……うわああああ」

俺は匠を首しか出ない状態まで砂に埋めた後、偶然にも持っていたミカンを匠の頭の上に乗せた。

『第一回、チキチキ！鏡餅割り大会』

「おかしいから！スイカ割りじゃないの？つてか動けん！！」

『はい、友美ちゃん。この釘木づちであのお餅を思いっきり叩くだよ?』

「なんで木づちに釘ついてんの?そんなん持つてくんなよ!ってか俺は餅じゃねえ〜!」

『うるさい餅だな…ムンツ!』

俺はミカンを握り潰し、皮から出る果汁を一滴もこぼさぬように匠の目に注いであげた。

「ひ…ひあああ!」

今回は前回と違って体の自由が効かないため、手でふく事もできない匠は、なす術もなく泣き叫んでいた。

『よし、飽きた。かき氷でも食いに行こうぜ』

「『『『お〜う』『『『」

五人は海の家へ。そう、敗者は去るのだ。

海の家の前に人だかりができている。何やらコメディーの前触れだ。

「さあ〜かき氷早食い大会だよ。優勝者には賞金五万円が出るよ」

「面白そうじゃない。明、あんた行きなさいよ」

『まかせな舞。俺は地元の一部じゃ

「氷荒らしの明さん」

と呼ばれた男だぜ？』

「待て…俺も出るぞ」

やっとリョータがしゃべったね。

「リョータ…あんた、冷たいの苦手じゃないの？」

「かき氷が食えないで…何が男だ」

なんか勘違いしてるぞこいつ…。

「お前には負けん…」

恐ッ！

なんでこんなムキになってんのさ。

「さあゝ参加者十名が揃ったね。ルールは簡単！この巨大かき氷を1番に食べ切った人が優勝だ」

うん、想像してたけどこれはデカすぎるよね。

なんでかき氷がごみバケツ一杯に入ってるの？

きたなくね…？

「ちなみに参加費は一人五千円ね」

言うの遅いから！

くそ…何かなんでも負けられねえ！！

「よーいドン！！」

『うおおお！どうおおお！ひいやあああ！！』

冷たい…。ってかシロップなしってキツくない？

しかもそこらに原形のままの氷がゴロゴロ入ってるんだけど…。

次々にリタイアしていく参加者達。普通こんな量食えないよな。

残ったのは俺とリョータ、あと一人は家族連れのパパの三人。

く明VSリョータく

「シャリシャリ…お前には…シャリ…負けん！」

『ガリガリ…口ほどにもないな…ガリ…量が減ってねえぞ？』

…あれ？

原形のままの氷が入ってるのって俺だけじゃん！

「シャリ…虫歯に…しみる」

情けねえ…！！

く明WINく

よし、もう楽勝でしょ。残りはあと少し！

相手はまだ半分以上残ってるパパさんだけだしな。

「明VSパパさん」

『ガリ…あきらめた方が良いつスよ？ガリガリ…もう俺の勝ちっばいし』

「ゴク…私達は、海に心中しにきたんです。ゴクゴク…でも、この五万円さえあれば…」

おかしいね。まずなんでパパさん原液シロップなの？

しかも心中って…五万円じゃ足りないでしょ。

でもなあ…聞きたくない事聞いちゃったな。

俺が勝つたらあの家族死ぬんでしょ？

あの小さいお子さんの将来はどうなの？

「ゴク…お願いします。ゴクゴク…リタイアしてください」

『パク…ガリ』

俺はためらいもなく最後の氷を口に運んだ。

「優勝は…最後に鬼のような卑劣さで勝った明さーん この賞金は

何に使いますか？」

『そうですね…とりあえず高校生らしく新作の北斗の拳S でもやりますわ』

「はい、そんなくだらない事のために一家の生命を経たせた明さんでした。ではシーユーネクストタイム また次回をお楽しみに」

第10話　そりゃ俺だつてやるときゃやるさ

海で一通り遊び終わった俺達は宿泊先の旅館に来ていた。

なんともボロな所だがこれがまたミソである。

…なぜならそう、隣の女子部屋の会話が丸聞こえなのだ

「うーん…ウチ的には旅館よりもホテルが良かったって感じたケロ
」

「でも結構広いよ？なんか落ち着くし」

「あ、男共が入ってきたら私にまかせてね。火器付きショットガン
で…」

うん、最後に変なのが聞こえたけどあえて無視しよ。
しかし、さすが舞だな。友美ちゃんと正美と会うのは今日が初めて
なのにもう仲良くなってる。

「明…」

リョータが俺にかなり低いトーンで呼び掛ける。

『何かな？私に負けたリョータ君』

「話がある…表出ようぜ」

おいおい、なんのツッコミもないのかよ。こりゃまた真面目な話かあ？

〔夜中の砂浜〕

夜中の海は月明かりが綺麗で昼の海とはまた違った魅力がある。

しかし、そんな事に感心すらできない空気だ。

『何…？話って』

決してラブコメではない。

「お前…なんで俺の前でも舞と仲良くしてやがるんだ？」

やっぱりね…。どうりで俺に対して冷たいわけだ。

「しかも第一話で舞とニケツしてるし…」

そこまで知ってんのかよ！

『いや…あれは、舞が勝手に乗ってきただけだし断ったら殴られたし…リョータもすぐ殴られて大変だろ？』

ハハハと笑う俺に対してリョータは眉一つ動かさずに睨み付けてくる。

「俺は舞に殴られた事など一度もない。それどころか舞が人を殴るなんて聞いた事もなかった。…なのにお前を殴っていた。舞にとつてお前は特別な存在なのかもな…」

やっぱり妬いてたんだなこいつ。

『安心しろって！舞とはただの幼なじみ。俺は舞に恋愛感情を抱いた事なんかガキの頃だけだって』

「…フツ、舞と同じ事言うんだな」

…え？

あいつもガキの頃は俺の事を…？

「ああゝ！駄目だ！！ムシャクシャする…おい！」

そう言ってるリョータは構える。

『ああ、ちょうど俺もムシャクシャしてたんだ。このままじゃ毎晩のように枕元にあの家族が立つかもしれない…ってな！』

「…フツ、いくぜ！」

多少強引な展開から始まったりリョータとのタイマン。リョータは勢いよく鋭い右ストレートを撃ってくる。

暗くて視界が利かないが、俺はリョータの右ストレートに左手をそえる形で受け流す。

隙だらけの顔面に視角から左フックを繰り出すがしゃがみ込まれて、かわされてしまった。

(こいつ…できるな)

気迫で押されては負けである。俺はしゃがんでいるリョータにローキックを繰り出す。

く
パァンく

(下段払い…？こいつ、空手使いか！？)

よく見れば構えが組み手のようになっており決まっている。

俺には格闘技の心得がないため経験者に勝つのは厳しい。

ヤバイ…と思った瞬間、手刀が飛んでくる。

『…くっ』

かろうじてかすった。…が、洋服の腹部のあたりが切れていた。

(…マジかよ)

勝つには一撃で倒すしかない。あごを狙う！

俺は一気に距離を縮めに前に出る。

リョータが正拳づきを放つ。

威力が1番小さい場所…拳を引いた所まで身を寄せる。

『…ぐっ！』

くらいはしたものの勢いが無い所まで身を寄せればたいしたダメージはない。

(…もらった！)

俺は身をかがめ、あご目掛けてアッパーを繰り出そうとしたが…

ズキュン

ええー…銃声！？

ピタリとあご寸前で拳が止まる。しかし、これで格付けは済んだ。

「急に二人共いなくなったからこんな事だろうと思ったわよ」

俺達の足元にかするかぐらいの絶妙なコントロールで撃ってきたのは舞だった。

…例の火器付きショットガンで。

「リョータ…説明して？」

「別に…ただ、なんでこいつは殴るくせに俺は殴ってくれないのか？…って」

いやいやいや、それじゃあ君、Mって誤解されちゃうよ？

「好きな男を…殴れるわけじゃないじゃない」

つまり、俺の事は嫌いなね。

「舞…」

くチュく

おーーーーい！

人前だぞ！？

コメディーだぞ！！！？

くザンく

…ん？

『おい、お前ら！イチャつくのはいいけど…この砂浜に波きてっぞ
！』

「あ…！この海、真夜中になると満潮がくるんだわ！」

「あゝあ…しょうがねえ、戻っか！」

慌てて旅館に戻った俺達。

「明…悪かったな」

『気にすんなって！でもまあ、俺の勝ちだったな』

「あ！？あんなアッパー、ギリギリでかわせてたね！」

『無理無理！あの攻撃はあそこから加速して時速200キロに達するんだもんね！』

「バカ野郎！俺の首の動きは210キロの速度で動くもんね！」

くズキン

『さて…お風呂でも入ろうか、リョータ君』

「そうだね明君…僕が背中を流してあげるよ」

こうしてなんとかリョータの誤解も解けた。

…あれ？

この部屋って男一人だったっけ？

まあいいや、どうにかなるだろう。

第11話　！オラ匠　なんだい？今回は僕が主役かい？

「ガバゴボ…ガバゴボ！（助けて…助けて！）」

ヤバイヤバイヤバイヤバイ！

ヤバイよこれ！！

あ、オラ匠

…明、ツツコミ（助け）に來いよ…。

結局、砂に埋められっぱなしで動けないままみんな帰りやがって！

なんで潮が満ちてくんだよ…。

………息が………できな…

～一方こちらは例の家族～

「パパあゝ夜の海って誰もいないんだね」

「…そうだな」

「ママあゝ来年も絶対来ようね」

「………」

「ねえ、なんでパパもママも泣いてるの？」

「ゴメン…ゴメンな！パパがあの時…あの青年に勝っていれば…」

私はなんと情けない父親だろう。自分の会社での失敗に家族を巻き込んでしまうなんて…。

「あなた…そろそろ行きましょう…」

「…そうだな」

「パパ、ママ…どこ行くの？そっちは海だよ？ねえ！」

もう死ぬしかないんだ…もう…。

くゴツンく

…ん？

足に何か当たったぞ？

石…じゃない…！

人の頭だあー！！！！

「おい、君…！」

「ガバ…ゴ…ボ（助…け…て）」

「大変だ、何と言う事なんだ！まさか私達以外にも自殺を心見ている人がいるなんて」

「ガバ…ウ（違…う）」

「こんな…生に対する未練を絶つ死に方をできるなんて…！なんと勇敢なんだ…！！」

青年は首だけを砂から出す形になっている。きつとよほど辛い事があつたのだろ…。

いざとなって逃げ出せないようにしている青年に対して、私達はなんと情けない！！

迷うのはもうヤメだ！

及ばずながら私もこの青年の隣で一生を終えよう。

くザクザク

「ガバ…又オオオ！！ハアハア…」

し…しまった！

この青年がまさか横たわって埋まっているとは思わなかった！

どうしよう…せつかく彼が死を決したのに私が助ける形になってしまったぞ！

「あ…ありがとう…ハアハア…」ごいますー！」

「ゴメンなさ……え？君は死のうとしてたんじゃなかったのかね？」

「まさか！こんな所で死にたくないですよ！でもおかげで助かりました。すつごく苦しかったんですよ」

すつごく……苦しかった？

「いやあゝ死ぬっていつでも溺れ死には絶対したくないですね！」

溺れ死には……嫌？

「生きてて良かったあゝ」

生きてて……良かった？

「ところで……家族そろってどうしたんです？……まさか」

「はい、家族で死のうと……」

「駄目です！絶対駄目！！世の中もつと良い事ありますって！とにかくほら、潮が満ちて来ました。早く離れましょう」

ゝ海岸沿いの階段ゝ

「何があつたんですか？一家で自殺なんて……」

私は青年と二人で階段に座り込んだ。

子供と母親は旅館に戻した。この青年との出会いで何かが変わるか

もしれん。

その奇跡を信じたかったから、死ぬのは後でもいい。

「き…君の方こそ！なぜ埋まっただんだ！？私達がいなかったら本当に死んでたんだぞ？」

「埋められたんですよ！明って友達に…」

…明？

明…明…明…明…あ————！！！！

優勝賞金をかつさらった例の悪魔かあ——！！

「私達が死を決意したのも…明という青年が原因だ！」

「な…！明が？明が何かしたんですか！？」

「まあ…彼に勝っていれば賞金を手にできて…なんとか首が繋がったんだが…。ってか彼は本物の悪魔か？君の事をほったらかしにしてたんだろ？」

「まあ…あいつの事だし、どうにかなると思っているんでしょね」
どうにもならなかったら、どうするつもりだったのだろうか…？

「なんとか…あの悪魔に一泡ふかせてやりたいな…」

「そうだ！明はあなた達家族も…もしかしたら僕も死んでると思っ

てるわけでしょ？ だったら真夏の心霊ドッキリでもやりませんか？」

「おお！それは良いアイデアだ。次回が楽しみだな」

第12話　前回でオチ言っちゃってるよね、まあいいや

『スゲー！旅館はボロいくせにこの温泉にはこだわってんな』

俺とリョータは汗を流しに風呂に来ていた。

残念な事に女性陣は俺達がタイムンを張っている間に入ってしまったため秘密の花園を覗く事ができなかった。

『ほれ、背中流してくれんだろ？』

「…ちつ、しゃあねえな」

うん、匠とはまた違った男の友情が良い……

あー！

そついや匠どうしてんだろ？

…まあ、死んでは…いない…よな。

　ガサガサ

『うおおお！』

「なんだよ明、木が揺れただけだつて」

『ハハハハ、僕はビビってなんかいないよ？』

「…あ、あの木に例の家族が首をつつて…」

『それは見間違いだよりヨータ君。いいかい？これは数字のトリックなんだ』

「何言つてんだよ、嘘に決まってるだろ？」

くっそおゝリヨータの奴ビビらせやがって…。

この俺が世界で、舞とチーズの次に怖いのが、ゆ…幽霊なんだよね。

まさか…匠もあの家族も死んじゃって…本当に枕元に立つなんて…ないよな。

これはコメディーだ。ホラーではない。

『それそろ出ようか』

「は？さっき入ったばかりだろ？」

温泉 水 海へ身投げした家族…

駄目だ駄目だ、早く出なくちゃ。

「あの家族も…今頃は温泉じゃなくて海の底に浸かって…」

『何を言ってるんだリヨータ君。いいかい？これは数字のトリックなんだよ！』

「出たいなら一人で出なよ。俺はもうちょっとゆっくりしてから…」

『バカ野郎！すぐ出ないと今にあの家族が…』

「だって俺パパさんに負けたもん。怨まれんなら明だろ？」

『薄情者――！』

俺は一人でトボトボと部屋に戻る事にした。

『ちくしょう…もし俺が死んだらリョータを怨んでや……た！匠！？』

部屋の前にずぶ濡れの匠が立っていた。そう、じつと立っているだけ。ドアの前に…決して部屋の中に入ろうとせず…。

『たく…み？』

呼び掛ける俺と目が合った。真っ赤に充血している。これは海の潮でか…それともミカンの果汁でかは分からなかった。

匠はニヤリと笑うとスーっと部屋に入っていった。

『ちょ、待てよ』

キ タクに憧れている俺の呼びかけに反応すらしてくれない。

匠の後を追って俺も部屋に入るが…部屋に匠の姿はなかった。

窓は開いているがここは二階だし下はコンクリート。飛び降りればケガはするだろう。

『ハハアン…さては驚かそうと思ってどっかに隠れてるな』

俺は押し入れから隅々まで隠れられそうな場所をくまなく探したが…いない！

『ハハ、マジかよ…』

くガラガラく

『ヒイイイ!!』

「なんでスパイダー○ンのポーズ!？」

…なんだ、リョータか…。

『今…今、匠がこの部屋に!』

「何言ってんだってお前」

く目を閉じれば億千の星く

「お？携帯が鳴った。…ほら見る、匠からだよ」

『で…出ない方がいいって!』

「はい、こちら夜逃げ屋本舗。」

どんな出かたしてんだこいつ！

「ん…おーい？もしもーし？…切れちゃった」

『な…なんだって？』

「ん…なんか、明あ！明ああーって言ってた」

これヤバくない？

…うつ！

ヤバイ、ト…トイレに行きたくなってきた。

『メツチャイケメンのリョータさん、今ならなんと先着一名様まで水着ギヤルに囲まれてハーレムになれるイベントがトイレでやってるらしいよ さあ、競走だ！』

「マジ？行くしかねえな！」

『だろ？さ、早く』

「でも俺、舞いるし。ここは君に譲るよ。いってらっしゃい、一人ぼっちでトイレへ」

『ドちくしょーー！』

分かっているさ、所詮リョータは口だけが達者なんだ。

道端とかに口が落ちてたら『お？リョータじゃん』って勘違いしちゃうぐらいあいつは口が達者なんだ。

「ふふふ」

ぬおおー！

何、今の声？

くペチヨく

うわ、足で何か踏んじやった…って口ー！？

なんで廊下に口が落ちてんの？

『よよよよお…リョータ……相変わらず達者な口だ…』

くパクパクく

『ひいやあああー！！！』

「おい、どうした明！？」

『てめえ口くらいちゃんと付けとけー！』

「何言つてんだよお前！？」

リョータにはちゃんと口が付いていた。…とすると、あの口は誰のなんだ？

「いや、普通口とれないから」

『本当にあつたんだって！頼む、もう漏れそうだ。いっしょに来て

くれ』

もうこの際プライドだろうがなんだろうが関係ない。

「何もないぞ…?」

バ、バカな!!

さっき確かにここに人の口が落ちていたのに。

「ビビりすぎて見間違えたんだろ?」

『…うつ!もう限界だ!』

俺はトイレまでダッシュした。

く幸せと生きている意味を味わっていますく

『フウく、間に合ったあ。ったく、なんで部屋にトイレがないんだよ!ボロいつても考えものだな』

なんて愚痴を言っていると

くペタ…ペタく

足音!?

『リヨ、リヨータ?』

そつ、俺はダッシュのあまりリヨータを置いてきてしまった。

くペタ…ペタく

ああああ足音が…ぬぬぬぬ濡れてる！？

くピタく

いや止まるなよ！

「よゝくも…あのとき…」

『いやああああー！』

そこで俺は気を失った。

目が覚めると部屋にいた。

リョータ…舞…正美…友美ちゃん…匠…

匠！？

「ハッハッハッ、ドッキリだよ、明」

匠がカラカラと笑っていた。そして…例の家族も。

『あんた達…生きてたんか？』

「まあ、この家族に助けられたって感じかな。だからほら、賞金はあげなよ」

『ちっ…分かったよ。本当に化けて出られたらたまないからな』

俺は家族に賞金を全額渡した。しかしドッキリで良かった。

『手の込んだドッキリだな…本物かと思ったよ。』

「ハハハ、まず、ここは三階建てだろ？この部屋の真上がこの家族の部屋なんだ。明が来る前に上からロープを垂らしてもらってそれで上ったのさ」

だから消えたように見えたのか。

「まあ、トイレに行った明を脅かすなんて簡単だな」

「私の足を濡らして歩けば良いだけだからね」

くそお…なんかパパさんの口調がムカつくぞ。さっきまで死のうと
してたくせに…！！

『まいったよ…でもあの落ちてる口はどうやったんだ？妙にリアル
だったぞ？』

「口…？何それ？」

『は？だから…廊下に落ちてた口だって！』

「いや…私と匠君が仕掛けたのは二つだけだが…？」

…まさか、本物の…？

みなさんも真夏の夜にはお気をつけて…

第13話　まだまだ俺達の夏は終わらない

『イヤッホーイ』

　　ザバーン

今回もビキニのお姉さんがいっぱいですね。

そう、俺とリョータと匠の男三人でプールに来ている。

「なあ…なんで舞とか連れてこないんだよ」

ブツ、リョータったらご機嫌ななめだね。

『だって前回でみんなの水着姿見ちゃったしいゝ今日の気分はお姉さんって感じだしゝ』

「なんだそれ！俺はもつと…あ、いや…」

『もつと何？舞ちゃんの水着姿を見てたかったのかな？』

「うつせえ！そんなんじゃねえよ！！」

初々しい奴だな、顔を真っ赤にしちゃって。

俺達は中学生以上しか入れない深いプールのパラソル下に荷物を置いて水着に着替えた。

ここなら人が以外に少なく喫煙所なのだ。

…え？

うん、まあ今時の高校生なら煙草ぐらい当然でしょ？

「あゝヤ二切れだケロゝ」

ほら、隣のケロケロ言ってるギャルも高校生なのに煙草を…ん？

ケロケロ…？

「あ！タクミン達も来てたの！？」

「おお 正美じゃん」

…くそ、なんで正美がいるんだよ。まさか舞と友美ちゃんも？

「マイチとトモミンは今日いないケロよ？ウチの中学生の頃の友達の水啼^{ミスキ}といっしょに来たんだケロゝ」

「はじめまして、水啼です」

結構可愛いな、少し長い髪は綺麗なストレートで目がパツチリしてる。正美の友達にしてはそんなにギャルじゃなさそうだし肌も白い方だ。

「んじゃみんなでウォータースライダー行くケロゝ」

「おおー！」

なんでこっなんの？

今日は綺麗なお姉さんをナンパするつもりで来たのに……。

くザアアア…バーン！

速っ、ってか長っ！！

ここのウォーターライダーは三種類あって、俺達は一番高い所に来ている。

頂上から下までは真っ直ぐなストレートでスピードもかなりのものだ。

しかし…俺はなんでリョータと二人でいるの？

なんで匠は女の子と下で待ってんの？

「あああ明、ふふふ震えてるぜ？」

『いや、これは怒りで…あれ？もしやリョータ君。ウォーターライダーは苦手なのかな？』

「馬鹿な事言ってんじゃねえ！俺はMAX75キロ出るんだぞ！」

『じゃあ、賭けやろうぜ！先に下着いた方が勝ちね 負けた方は罰ゲームで、もみじだかな！』

もみじ…それは背中にパアンと平手打ちを食らわして手形がもみじ

のようになる事からそう呼ばれている。

「…え？いや、それはちょっと…」

『監視員さん、笛を』

くピーく

『じゃああああー！』

「う…うわあああ」

勢いよくすべり落ちる俺達。速度を上げるため、空気抵抗を受けないように顔は上げずに寝そべる。鼻に水しぶきが入り少し痛い我慢だ。

「ひひひひひ」

隣のレーンからはリョータの悲鳴が聞こえた。

結果は言わずとも俺の勝ちだった。

『リョータ…ビビりすぎ』

くパアンく

「いつてええ！この野郎」

怒っているが背中には、くつきりと俺の手形がついているため情けない姿である。

『ん？もう一回やる？』

「当たり前だ！負けたままで終われるか！」

リョータは負けず嫌いだから乗せるのが簡単だな。

『じゃ、負けた方は翼ね』

翼…それは両手で平手打ちを食らわす事で二つの手形が翼のようになる事からそう呼ばれている。

「え…それはちよっ…」

くピーく

『しゃああああ！』

「展開早過ぎい…」

ってな感じで一時間以上繰り返し、結局リョータは一回も俺に勝てず、背中は新・耳ぶく〇みたいに手形でみっちりだった。

「明君って速いんですね 水啼もすべりたあ〜い」

匠とゲロゲく口は二人で昼飯を買いに行ってしまったので俺と水啼と新・耳ぶく〇の三人でパラソルに戻っていた。

『いやいや、相手が弱すぎるだけだよ。弱い者イジメしたって笑い

話にもなんないしね』

「明…てめえ」

「お待たせだケロ はい、みんなの分」

匠達がみんなの飯を買ってきてくれたが、その前にやらなくてはいい儀式がある。

『俺が足をもつから、リョータは手を…』

「了解…」

くガシツく

「ん、なんだい？二人共、僕の手足を持って…ハハハ、これじゃ身動きができないや。ちよつと…！ねえ！！」

「なんで俺様があんな怖い思いしてんのにお前は女と！」

「まさか君達は僕をプールに投げるつもりなのかい？」

『いくぜリョータ！せーの…』

くポイく

くヒューー…く

くユウー…く

「長い長い！どんだけ投げてんだよ」

く……………ベチャく

「投げる方向…逆だろ…」

『テヘ　うっかり明でした　』

さて、儀式も済んだし飯でも食うかな、匠の分まで。

「ちっ、煙草切れちゃった…ちよっと買ってくるわ」

『リョータ、それなら俺のマルメンやろっか？』

「メンソールなんか吸えるかよ、男は黙ってセッターだろ」

『ああそうですか！いつてらっしゃい！！』

まったく…すぐリョータは気取るんだから。やっぱ口だけ達者な奴だぜ。

くブーブブブーンく

うるせえな…うわっ、なんて場違いなヤンキーなんだよ。フェンスの外側では原チャリをノーヘル二ケツで走り回っている奴らが六人くらいいた。

あれじゃ今から来る人達に迷惑だろ…警備員は何やってんだよ！

『プールに入る金もないってか？あんな事してて親に悪いと思わな

いんかねえ』

「なんか恐あい…」

『大丈夫だって水啼ちゃん。さ、飯も食ったしプール入ろうぜ』

「そうだケロくほら、行くよタクミン！」

「お…おっ」

その後俺達はプールに入ってビーチボールを匠に当てたりだとか、匠のゴーグルを力チ割ったりだとか、ビーチボールを匠に当てたりだとか、ミカンを匠の頭の上に乗せたりして遊んだ。

「いや、俺可哀相すぎでしょ!？」

『…にしてもリョータの奴遅いな。あいつ方向オンチだったっけ?』

「タクミン、迎えに行つてあげなよ、ウチと水啼で待ってるから」

「そだな…行くか、明」

『お…おっ』

俺はこの時、なぜか嫌な予感が走った。

何もなければいいが…。

第14話　やっぱり男は黙ってセッターでしょ

「えっと…うわ！なんだよ、セッター売り切れかよ！しょうがねえ
…外の自販機まで行くか」

…ん？

おう、俺はリョータだ。今回は俺視点でやってくぜ

プール内の自販機に煙草を買いに来たんだけど売り切れでした、つ
てノコノコと帰れねえしな…外の自販機まで行くしかないか。

「すみません、自販機行きたいんでちょっと外出てもいいっすか？」

「ああ、別にいいぞあ」

なんてやる気のない警備員なんだ！！

ここのプールの警備大丈夫か？

くブーブブブーン

うわ、場違いなヤンキー発見。ってなんか注意しろよ、警備員！！

「ねえねえ俺達、今お金なくて困ってんだよねえ…ちょっと貸して
よ」

最悪だ、絡まれた！

相手は六人か…ヤバイな。原チャにノーヘルニケツって激アツだなこいつら。

全員ほぼ髪色が変わだぞ？

赤とか金とか紫とか…つか学校とか行ってんのかこいつら、歳はタメか一個上だな…。

「シカトこいてんじゃねえぞコラアア！」

なんて考えてるうちに徐々に口調が悪くなるヤンキー達。

「ちよつと面貸しな ヒヤハハ」

く木に囲まれた場所く

ったく…うぜえ奴らだ…。

「くつ…うおお！」

くドグツ！く

…よし、あと四人。

「おい、こいつ強いぞ！いいね…楽しいねえ！！！」

こいつら、狂ってやがるぜ…。人を殴って快感を得る連中か…。特にこの連中のリーダー格の男は体型がいい、昔ボクシングあたりをやってただろう肉体美だ。

「遊びはおしまい…抑えろ！」

そのリーダー格の男の合図と共に残った三人が同時に飛び付いてくる。

「俺の体にしがみついているのは…舞だけなんだよ！」

一人は払ったが二人に腕と足の自由を奪われた。

「へへ、素直に金出せばいいのものを…くらえ！」

くドグ

「ぐはっ」

リーダー格の男の正拳が俺の溝にヒットした。

「おらおら!!」

一撃で立てなくなった俺は袋だたきにあってしまった。

最初に倒した奴らも回復して、六対一のまさにピンチである。

「おい、もう終わりか？」

「悪いな…俺はMなんだよ…」

「くたばれ!!」

やられるっ!!

くガシッく

『てめえら…何やってんだ？』

明と匠か…ナイスな奴らだぜ。

『まっ、食後の運動だな』

「気をつけろよ明！そいつ、格闘技をかじってるぞ！」

いくら俺に勝った明でもこの人数相手じゃ無理だ、絶対勝てない！

「心配すんなってリョータ、君は知らないだろうけど…明は…」

『うおおおおー！！』

「明は一年前、リユーファの…元ヘッドだった男だ」

リユーファのヘッドだと？

確かピークだった頃が一年前、明が住む地域一辺を脅かした伝説の族のヘッドが…明？

「匠、本当か？それ…」

「ああ、今はもう引退したけどな。ある事件が原因で…。だから明はこういつヤンキーを許さないんだろうな」

へっ、安心したのか…？

気が…遠の…い……

—————。

「はっ！」

『お、気がついたカリヨータ』

「ここは？パラソル…？お前！一人で六人も！？」

『まあ…余裕でしょ 今みんなでジュースでも買ってくるって言うてたから、もうちょい寝とけて』

明が元ヘッドか、まさか六人相手に勝つとは…。

『ほらよ、煙草切れてんだろ？やるよ』

「マルメンか…ちょうどスッキリしたいところだった」

たまにはメンソールも悪くねえな。

「明…お前、元…」

『それ以上は言うな』

「あ…ああ、悪い。あと…ありがとな」

『おう』

やはり何か過去にあったのか、つついて確かめる気はないが…

「あ、リョータンが起きてる　まあダメじゃない、煙草買ってる所を警備員に捕まっちゃ！」

「…え？いや、俺はヤンキーに…」

『全くだよ、リョータったら警備員に絡まれちゃって必死で謝ってたもんな』

「は？…え？」

訳も分からず戸惑う俺に明と匠が目で合図をしてきた。

（さっきの事は内緒だぞ！）…と。

「あ…いや、ハハハ。そおなんだよ、俺って童顔だからかなあハハハ」

明はヤンキーとかに異常なコンプレックスらしいものを持ってたっ
ていい。

明の過去に何があったかはどうだっていい。

ただ、ずっと友達でいられるなら…

それでいいんだろう。

番外編　俺の過去に何があったかって？君も物好きだなあ

「ごめんなさい…ごめんなさい！」

『絡む相手を間違えたのが運の尽きだな』

「知らなかったんです、あなたがまさか明さんだなんて…」

『目障りだ…消えろ！』

つまんねえ…ありきたりな毎日。高校に入ってたって何も変わらない。

クラスの奴も喧嘩は弱いし根性がある奴もない。俺に逆らってくる奴すらいらないなんてな。

まあ当然か、高一でリユーファのヘッドだもんな。

いや、そういえば…俺に普通に接してくる奴が一人いたっけな。

「あっきら〜おっはよ〜」

こいつだ。朝っぱらから馬鹿みたいにでかい声で挨拶してきたのは大島おおしま智則ちのりだ。同じクラスでなぜか智則だけは俺になついてくる。

「お、おい…早く行こうよ、智則…」

智則の後ろで俺の顔を見てビビってる奴は…確か匠とか言ったな。

「んじゃ　三人で行きますか！」

『いや、俺今日は学校サボるよ』

「ええ〜？俺なんて皆勤賞狙ってんだぜ？」

皆勤賞とか中坊でも喜ばねえよ…もう高校生になって半年も経つのにまだまだ餓鬼か…。

「智則、早く行こ！電車来ちゃうよ」

「分かったよお〜。明！遅刻してでも来いよ！」

俺は片手を上げて奴らの前を後にした。

駅の地下にあるゲーセンで暇を潰す。先客は学校をサボり、リユーフアの一員である連中がほとんどだ。

いつものくだらない不良仲間。しかし、リユーフアというグループのヘッドである以上、下の奴らの前では常に威厳を発しなければならない。

しかし、いかに下の奴らと言えども年上の連中ばかり。

いつまでも俺の下にいるなんて限らない。ただ、喧嘩が俺より弱いだけ。

「くそ、なんでこいつの言う事なんか聞かなきゃなんねんだよ…」
なんて小言はしょっちゅう聞こえてくる。

『なんか言ったか？和也さん』

「いや、何でもないっスよ」

和也かずやと言う奴はリユーファで二番目の実力者であり、二つ上だ。

今まで誰にも逆らわれず生きてきた和也が年下の俺に敬語を使い、何より喧嘩が勝てないと言うのに腹が立つのだろう。

俺がいなければリユーファを仕切るのも和也だしな。

「明さん！駅八番線の便所で仲間がやられました！」

腫れた顔で報告に来たのは同い年の拓哉たくやだった。きっと喧嘩でもしたのだろう。

拓哉はリユーファの中ではちゃんと学校に行っている奴で、八番線と言えば拓哉が乗る電車から一番近い便所だ。

「いつも通り煙草を吸ってて、二人組の奴らに絡んだんですけど…片方の奴が強くて三人がかりでやられまして…」

『和也さん…行きますよ』

「へいへい、お前ら！行くぞー！」

俺を含めてゲーセンにいたリユーファの一員四人で例の便所に向かう。

三人がかりに勝った奴なんて相当強いと期待していたが…

俺達が着いた頃にはそいつは既に床に屈していた。

とはいえ、倒れているのはリユーファのメンバーも三人。

俺達より早く加勢した二人に倒されたのだろう。

ここの便所は以外と広く、一番奥のホームから近いたためか、さっき電車が出たばかりのためか、あと一時間以上は人が滅多に來ない。

『もう終わったのか、たった一人にてこずりやがって…おい!』

俺は倒れている奴の髪を引っ張り顔を覗いた。

『…と、智則!?!』

そこにいたのは智則だった。

「へへ、皆勤賞…逃しちまったよ」

なんでこいつなんだ？

「この野郎!」

和也が智則を蹴り飛ばす。智則の鼻と口からは夥しい程の血が出ている。

『やめろ和也さん!もういいだろ!』

「まだだよ！せっかく来てやったんだ、殴らなきゃ気が済まねえ。
お前らもやれ！」

和也が一員に声をかける。もう智則は動けないと言うのに袋たたき。
「ほらほら、リユーファのヘッドであろう男が見学ですか？明さん
よお！」

『…めた』

「あ？」

『たった今、俺はリユーファをやめた。』

「つてことは俺がヘッドつて事でいいですね？お前ら！みんなで明
も潰せ！」

くくつ、五対一か…。

でもな、智則は友達だ。こいつらは全員許さねえ！

—————。

ハアハア、さすがに厳しいな。拓哉は俺に勝てないと察したのか腰
が引けているし、和也は俺が苦しむのを楽しんで見ている。

おそらく俺がバテた所で出てくるのだろう。

三人相手に俺は死闘を繰り広げたがさすがに限界だ。

「そろそろ疲れただろう、お前らどけ！俺がケリをつける」

この状態で和也が出て来てしまつてはタイマンでも勝てない。

もうダメか…そう思ったその時だった！

「お前ら！何をしているんだ！！」

駅員が駆け込んできた。後ろには匠がいた。おそらく匠が駅員を呼びに行ったのだろう。

結局この事件が学校にバレてしまい、俺は一週間の停学をくらった。

停学で済んだのはリユーファを辞めていた事と智則を守るための不可抗力として認められたためだ。

現場にいたリユーファの奴らは学校に席が残っている奴は退学。

さらに全員補導された。

智則はというと…頭の打ち所が悪かったため緊急で手術をした。

命に別状はなかったが…記憶喪失になってしまった。

とは言え、今までの事を全て忘れたというわけではない。

言葉の理解能力が欠けてしまい、思うようにしゃべれないのか、海外まで治療に行くため俺の前から姿を消した。

仮に元通りしゃべれるようになっても決してこの街には帰ってこないだろう。

匠はずっと泣いていた。友達を守れなかった事、己の非力さを悟った事。

しかし、それは俺も同じだった。友達一人守れなくてどうする？

これから俺に何ができる？

停学中の一週間、家で悩み苦しんだ。

停学が解消された日、家を出ないと間に合わない時間になっても俺はまだ部屋にいた。

正確に言えば、今日ほど学校に行きたくない日はない。

周りの連中は何と言うだろうか…俺が仕切っていたチームの奴らに友達を消されたんだからな。今まで以上に冷めた目を浴びるだろう。

重い足どりで玄関を開ける。

「あ…おはよ！」

門の前には匠の姿があった。一番怨まれる人間。

大親友を失った人間。

そんな匠に俺はどう接すれば良いというのだ…。

「遅刻しちゃうよ?」

『また…サボろうかと思って…』

この台詞も口癖のようになってしまった。智則に誘われたあの日だつて、俺は学校に行こうとしていたんだ。

ただ、人と馴れ合うのが嫌いで、素直じゃない損な性格。

「ふざけんなよ!」

今まで根性がない、ただのビビりだと思っていた匠が意外な言葉を発した。

「責任…とれよな!」

『ああ、責任か…分かった。俺はこの街を出ていく事に…』

「だからふざけるなよ!そんなの逃げてるだけだろ?」

『じゃあ…どうすればいい?』

匠は下をつつむいて、俺の目を見た。こんなに真っ直ぐな目で見られるとつい気落ちしそうになってしまう。

「俺は親友を失った…だから!明君に俺の親友になってもらっ!」

…え？

「ほ、ほら…早く学校行くよ！クラスのみんなには俺から言っていたから。明君は良い人だからって…」

俺は何を勘違いしていたんだろう。智則を守れなかったのはあの時、俺がいつしよに学校に行かなかったからじゃないか。

ゆっくりしすぎてて…気がついた時には遅くて…盗られるに決まってるじゃないか！

これから毎日…学校へ行ってやる。次は匠という親友と共に。

「明君、早く！俺の親友はこれから皆勤賞を狙わなきゃ駄目だからね！」

『匠…ありがとう。それからな、親友だったら君つけはいらねえ…明でいいよ』

「そっか…よし、行くぞ！明！！」

『おう、匠！』

智則…いつか戻って来いよな。その時は今度こそ、三人で学校に行こうぜ。

第15話 おかえりなさい、智則君

短かった二年生の夏休みも明け、今日からまた学校に行くために玄関を開ける。

「…よ、明。覚えてるか？」

『と…智則！？』

信じられない。一年前から消えた智則が…俺の家の玄関の前に…しかもちゃんとしやべれている。

『な、なんで？大丈夫なのか？』

「まあな、海外の超一流の医者にかかれば後遺症もなく、これから普通の生活ができるみたいだ」

智則の父親は社長でこいつの家はム力つく程の金持ちだ。

きつとこの手術費用だって 億円はくだらないはずだ。

「じゃあ、明日からまた学校通うから、今日はあいさつだけだ」

『通う！？…あ、ああ、お大事にな』

「おう」

そう言い残し智則は帰っていった。しかし、あの頃のままの智則だ。

思い返せば前回の番外編で…

「ああきいらあゝ」

回想シーンもなしですか？

『なんだよ匠、朝からヒドイ顔して…あ、そういえばさっき…』

「今智則が来なかったか？」

『ああ、来てたよ』

「バカモン！それは変装したルパンだ！！追え、追ええゝ！」

銭形っスか！？

『まあ無事でなによりじゃねえか、それより早く学校行かないと遅刻するぜ？』

いつのまにかあと5分で電車が来てしまう時間になっていた。

「何？それは真か！」

今日の匠のキャラはつかめない…。ま、智則が帰ってきたからテンションが上がってるんだろうな。

「明、今日は始業式だけだから午前中で学校終わりだろ？帰ってきたら、《智則復活記念パーティー》やろっぜ！」

『お、いいねえ』

たまにはまともな事を言う匠だった。

「よし、決まり！」

そんな感じの会話で盛り上がり、教室に入る。まあ、直接関係ないとしても舞達も誘うかな。

始業式も無事終わり、放課後俺達は駅に集まった。

こうして、俺、匠、友美ちゃん、舞、リョータ、正美の全員強制参加が決まったわけだ。

やる場所は智則にパーティーの事を話したら快く自分の家を使ってくれと言ってくれた。

『んじゃ匠、俺達で酒を買ってこようぜ。舞とリョータは晩飯の材料を、友美ちゃんと正美で調理を頼んだぜ！』

「「「「「おおー！」「」「」」」」

あれ、「」が一つ足りない？

「あ、明？酒…俺達で買うの？」

何やら匠は乗り気ではない。言い出しっぺのくせに…

『当然だろ？匠、酒飲めるよな？』

「好きだけどお…」

『じゃあ着替えてコンビニ行くぞ！二時間後にまたこの駅集合！では解散』

匠の奴、何か様子がおかしいな…。まあ、それは次回であきらかになるか。

第16話　明、匠組…お酒は二十歳から

各グループごとに別れて行動に入る。

俺と匠は近くのコンビニに酒を買いに行く事にした。

「あ、あ、明。お前、酒買えるのか？」

『あ？そりやまあ普通に…あ！もしかして、お前店員に止められるんじゃないかビビってんな？』

「バ、バカ言え！今日で酒を買うのは三ヶタ突破だ！俺は《コンビニの狼》と呼ばれる男だぞ？」

…うん、こいつ確実に初めてだしビビってるよね。

タバコの自動販売機でもいっつも周りをキョロキョロしてるからな…。

「ヤバイ！パトカーだ！逃げるぞ！」

いや、まだ買ったわけじゃないし…

「ふう…まいたか」

いや、すれ違ったただけだから！

こんな調子で大丈夫かな…でも、匠に買わせるのも面白いかも

「ウィーン」

「いらつしゃいませえ」

愛想の良い笑顔で迎えてくれる店員。この昼間じゃフリーターと思われる二十歳前後の若い女の人と、厳しそうな顔付きの店長と書いた名札を付けた人の二人で営業していた。

『やっぱチューハイとビールと…やっぱ枝豆は欠かせないな…』

「は、早くしろよ明！さっきから店長がこっち見てるぞ！」

ふッ…やはりビビっているのか、匠…。

『あ！財布忘れちゃった！悪い、匠がこれ買ってくれないかな？』

もちろん財布を忘れてたなんて嘘である。

「え…ちよっ…マジで？」

『さ、早く早く！』

…ニヤリ

しかもわざと店長のレジへ押し付けた。

…ニヤリ

「…これ下さい」

別に言わなくったってかごに入ってるんだから…

「お客様、お若い様ですが年齢の方は…？」

あゝっと、引っ掛かっちゃったよ匠くん！

さ、どうするどうする？

「じゅ…十八歳だ！」

……匠、

そりゃAVだ！！

「未成年の方には…ちょっと…」

さあ匠、このピンチをどう切り抜ける！？

「で、ですよねえ…ゴメンナサイ」

謝ったあー！！

こうして結局酒を買えなかった俺達だった。

「ふっ…まいたか」

まだ言ってやがるこいつ！

第17話　舞、リョータ組…スーパーでバイトしていましたが何か？

何にしようかなあ。

あ、初めまして

今回は私、舞視点でやってきますね。

今は私とリョータで駅から近いスーパーに来ています。

何でも、夕食の食材の調達などと言ったるい係を任せちゃったわけです。

「…で、何を買っていけば良いんだ？俺はこういう奥様ばかりいる所は好きじゃねえ」

『私だって嫌よ…』

現在時刻は3時。お昼も過ぎて空いてるんじゃないかと思っていたのに、まだ店内は賑わっているわ。

その理由は…たぶん目の前のあの人だからね。

「はい、いらっしやいませえ！ただ今より、タイムサービスで高級霜降りが千円から千円から販売しています」

…これだわ！

聞いた話じゃ智則の家はムカツク程の金持ちだったわね。私達を買った市民の料理なんか食えるかあ！　なんて言われたくない。

『リョータ、任せたわ!』

「マジ!?! だっておばちゃんと主婦達の形相が偉い事になってるんですよ!?!」

『いいから行きなさい! その間、私はこの試食品のメロンを喰らうわ』

「今時の女子高生が喰らうって… ああもう、分かったよ!!」

それでいい…。 残った骨は、ちゃんと拾ってあげるからね。

—————。

リョータだ、フツ、舞がメロンを喰らっているし、俺が人だかりの中に入りこんで見えなくなったため、ここからは俺様視点でやっていくぜ。

「ええゝ残りあと十個ゝあと十個… イタ、お… 押さないで…」

それはもうみんな凄い勢いで販売員のお兄さんも参るぐらいだ。

すでに目の前には軽く二十人はいる。この瞬間、十人以上は敗北の涙をすすする事になっちまった。

いや、急げばまだ間に合う。なにせ相手は四、五十のオバちゃんだぜ?

どう転んだら現役高校生が競り合いで負けと思う?

しかしなあ…なんで俺様はこうも運が悪い…？

俺様の足元には六十代の白髪のはあちゃん。この混乱で腰を痛めたのか疼くまっている。誰もこの状況に気付いていない。

いや、気付いたとしても、どこぞの他人のはあちゃんなんかよりも肉が優先の世界なのだろう。そこまでこの世は残酷なのだ。

「うう…孫が、孫が待つとるんじゃ…腰が悪いのに孫の誕生日じゃからと言って、こんなババアが来たのは無謀じゃったかのう……うう」

などと、痛がっている割りにはしっかりと脚本でも用意しているかの様にすらすらしゃべるばあちゃん。

ここで俺には二つの選択肢が与えられた。

A、ばあちゃんを無視！全力で肉GETの任務遂行。

B、ばあちゃんの手当てを優先。

（Aよ、迷う事なんかないわ。ためらわず…Aを選びなさい）

悪魔（舞）のささやきが聞こえた気がした。

この瞬間に俺にAを選べと言うのか！？　ばあちゃんを見捨ててでも…肉を取れとでも…！？

（リョータ…忘れたのですか？明は、今のあなたよりも辛い選択に

も関わらず、最後の一口をためらわなかった。リョータが明に負けた理由…鬼になれないあなたはいつまでたっても…)

俺様は、明には…負けない!!

—————。

気が付くと俺様は右手に肉を持っていた。

どうやら無意識のうちにAを選んでしまったようだ。

「おつかれリョータあ…、？リョータ？？」

俺様はさっきまでメロン喰らい終えた舞の出迎えを聞こえないふりをして、先程のばあちゃんの元へ向かった。

予想通り、接戦を終えた主婦達や店員が駆け付けていた。

『あの…、この肉、譲りますよ』

俺様は苦勞して手に入れた肉をばあちゃんに渡した。

「うむ、ご苦勞」

あれえ…？

なんか反応がいくら違うよねえ…？

「いやあ～楽しんで手に入れるにはこの手が1番じゃて。ヒヤハハハ」

このクソババア…

気が付くと俺は…右手に持った地球儀を振り上げ、ばあちゃんに忍び寄っていた…。

第18話 友美、正美組…ハイ、ポーズ

「……………」

『……………』

どうしよう。と言うよりも、何でしょう？

私達調理係で思わずOKしたけど、みんなが買い出しに行っている間は暇なのね。

あ、申し遅れました。

今回の視点は私、友美でやっていきます。

もうほんと久しぶりの登場ですね。みなさん、忘れてないですよ？

まあ、作者がキャラ設定を詳しく書いていないから私達の顔なんて想像できないでしょうね……。

「ねえ、トモミン」

『は、はい』

「暇だわ…せっかくだから、ウチらで遊び行っちゃおうよ」

『そ、そうですね。あと二時間以上もありますし、この（かんばし駅）は色んなお店がありますしね』

と、言うわけで私達で遊びに行く事に決まりました。

私や明達が住んでいるこの町は（かんばし町）と言って、ビルや商店がかなり栄えている方だと思う。

だから、遊ぶ場所なんていくらでもあるし、今いるかんばし駅も広いからここを出なくったって暇なんかいくらでも潰せるんです。

まず私達は地下にあるゲームセンターに来ました。

女の子がゲームセンターに来てやる事なんて一つ、

「プリ撮ろうケロ」

まあ、定番ですね。

『あ、最新のプリクラ機が出てますよ？これにしましょうか』

私と正美ちゃんは（チョメクラDX）とか言うプリクラ機で撮る事に決めました。

（いらっしやいませ、機械が指定するポーズで撮ると盛り上がるかも）

お金を入れた後ナビゲーターとして流れる若い女性の機械音。

「面白そうケロ　ちょっとこれが言う通りにしてみるケロか？」

（カメラを見つめて気分はモデル気分　3、2、1：パシャ）

一枚目は片手を腰に当ててちょっと気取って取ってみました。

（二枚目行くよ 1 + 1 + 1 + 1 + 1 + 1 … つて、多いよ！2じゃ
ないのかよ！アハハハハ マジウケるう） …… パシヤ）

ええー！！？

ノリッッッ！？

ってか何このプリ機！？

全然笑えないんですけど！

思わず驚いた顔で撮っちゃいました…。

（はいはい、ちゃっちゃんと三枚目撮るよ？もうなんか今日ダルいし……早いとこ帰って一杯やりたいし……は……い適当に笑って笑って……パシャ）

いや、笑えないですよ？

いきなり態度変わったやつてるじゃないですか!?

（おい、女子高生の時は俺に変われと言ってるだろ！）

（ちょ…急に出てこないでよ！私だって生活かかってるんだから！はい、もう二枚続けて撮るわよ？…パシャ、パシャ）

あれ？

ナビゲーター二人いるうゝってか喧嘩してるうゝ
ってか二枚続けて撮られちゃったし…。

「正美ちゃん、このプリクラ機ちょっとおかしくない？」

「なんか、鬼やばいケロ」

（うん？怖がらなくていいよ、正美ちゃん。さあ、おじさんが綺麗に撮ってあげるからね。ほら、もっと笑って…そして脱いで！）

見えてるんですか！？

ナビゲーターが変なおじさんに変わっちゃったし。

『何か、まともに撮れないですね…帰りましょうか？』

「そうケロね…」

（ええ〜帰っちゃうのぉ？もっと撮ろうよぉ…）

だからなんで聞こえるんですか！？

私達は余りの気味の悪さに途中にも関わらずゲームセンターを後にしました。

後に知った事ですが、チヨメクラDXは設置してわずか一週間の内に、苦情が原因で廃除されたそうです。

第19話 IN 智則君の家

いやあゝ久しぶりだ。なんか二話分も脇役の皆さん視点でやっちゃったからな。

と言うわけで、これからもこのスーパーエースの明様がチヨメディーをお贈りします。

さて、とりあえず俺達は全員駅に集合したわけだ。

しかし…もう駄目な奴らばかり！

結局酒は買えないし、舞達は食材買ってないし。

そして何よりツツコまなきやいけないのが…

『リョータ！なんで地球儀なんか買ってたんだよ！！』

「バツカ野郎！決してこの地球儀ではあちゃんを殴りかかろうとしたところを、舞に殴られて店員に怒られてお詫びに買っちゃったわけじゃないからな！！」

成る程、よく分かりました。

それにしても、智則の復活記念パーティーに行くのに手ぶらって…冒険者だな、俺達も。

まあ、いいや。智則の家で夕飯を作らせてもらおう。

—————。

かんばし駅から歩いて10分、そうたいした事のない距離に智則の家はある。

いや、これは家じゃないな、屋敷だな。

なんだよ、この広さは…小学校の校庭並の庭、四階建ての赤い屋根。部屋の数は大体20はあるな。ってかもう死ねばいいのになって感じだ。

「なあ、こんな広いなんて聞いてないぞ？」

いつも口だけ達者で気取っているリョータでさえ、目と鼻から大量の樹液を出して驚いている。

「いや、樹液は出てないから」

あ、そう。ゴメンね。

さて、いざ智則君の家へ！

くピリリリ！侵入者発見、射撃班、重装歩兵は出動してください！
いやいやいや、なんか敵つくておかしな人達がいっぱい出て来ちゃったよ？

どこで手に入れたか分からない様な高価そうで頑丈な鎧を着た方がザツと数えて十人。

屋根の上や地面がパカッと開いたスペースやら色々な所からスコップ付きの銃を構える方達がたくさんいました。僕たちピンチです

「ちょっと明！普通にインターホン押せばいいでしょ！？なに勝手に門開けてんのよ！！」

『いや、ついうっかり』

「高校生六人発見、武器は地球儀と見られます。どうしますか！？」

『リョータああ！てめえのせいで敵だと見なされてんぞ！？どうすんだよ！』

「仕方ない…お前ら、ここは任せる。みんな！俺を置いて先に行けえ！！」

と言い放ち地球儀を構えるリョータ。

『リョータ…』

「明、決着はまだ着いてないんだからな…」

『…って、漫画っぽい事してんなよ！！』

「すいません、僕たちは智則君のパーティーをやると思って遊びにきた友達です。中に入っても宜しいでしょうか？」

「なるほど、坊ちゃんのお友達でしたか、さ、どうぞ中へ案内いたします」

坊ちゃんって…智則の奴、どんだけの使用人がいるんだよ。

「ただし、この地球儀は預からせていただきます。」

重装歩兵の人はリョータから地球儀を取り上げた。まあ、当然だろうな。

「お…俺様の地球儀い！」

以外と気に入ってたんだ！？

「二万円もしたのに…」

高っ！！

通りで何も食材が買って来れないわけだ。

「あ、言い忘れてましたが皆さん。この家中に対・泥棒用の仕掛けがたくさん用意されてますので、くれぐれも物に触らない様、お願いします」

なんか怖いなこの家…。これだけの人がいるんだから冗談に聞こえない。きつととてもなく大変な目にあって…ってか死んじゃうかも？

「さ、どうぞ中へ」

ドアを開けると長くて広い廊下。家の中なのに靴を履いたままで歩いた。アメリカの家によくあるやつだ。

壁には高価そうな壺や絵画がズラッと並んでいた。

「キヤー この鹿の置き物、生きてるみたいケロ」

く力チツく

「ちよつと正美ちゃん、勝手に触っちゃ…キヤー」

はい、糞蛙が余計な事をして近くにいた友美ちゃんといっしょに床に開いた深い落とし穴に落ちていきました。

落ちた穴は元通りの床になり、まるで何事もなかったかのようだ。

果たして僕たちは生きて帰れるのでしょうか？

第20話くえ？もう20話？じゃあ巻頭カラーだ…うん、無理だよ

「正美！友美い〜！リョータ、どうしよう…」

「落ち着け、舞。地下には危険があるかもしれない！ここは武器が必要だ。この壁に飾ってある短剣を持って助けに…」

くカチツく

「うわあああ」

「キヤー…」

はい、リョータのせいでもた二人脱落しちゃいました。

別の穴から落ちていった舞とリョータ。残ったのは俺と匠だけ。

『ここはひとまず智則の所まで行こう』

「そうだな、でも…どこにいるんだ!？」

確かに…そこら中にドアがあってもしやトラップかもしれないという恐怖心が生まれてしまった。

『迷っていても仕方ない！この部屋だあー!』

「え…？キヤー!」

わあーい…女の子がお着替え中でした。

そしてリモコンを手にとりボタンを押すとあっという間に床に穴が開きました。

「明！…くっ」

瞬時に匠が俺の手を掴み、なんとか落ちないですんだが、体は宙釣りになり匠の手に全てがかかっている状態になってしまった。

しかし、匠も限界の様だ。映画なんかでは当たり前にあるシーンだが、実際に人一人の全体重を両手だけで支えるには不可能だった。

このままでは匠までいつしよに落ちてしまつと感じた俺は、力いっぱい匠の手を引っ張った。

その反動で片手が床にたどり着いた。

そう、匠と引き換えに…。

「うわああ…明！てめええええ…」

物凄い勢いで落下していく匠だったが俺の命が助かったのだ。匠はこういう役だろ？

「ちょ…あなた、今の人…友達じゃないの？」

俺に話し掛けて来たのは、不意とはいえ下着姿を見てしまった先ほどの女の子。既に衣類を着ていて、身長は150センチくらいの小柄な体格。髪はセミロングで幼い顔立ちの可愛い子だった。

ちなみに下着の色は上下純白である…ニヤリ

『ああ、今のは俺の捨て駒さ。将棋でいうなら王を守るためだけに張られた歩って感じかな。ところで君は？』

「あ、私は雪^{ゆき}。智則の妹ですけど…あなたはお兄ちゃんのお友達？」

智則に妹がいたなんて知らなかったな。しかもこんなに可愛い子から『お兄ちゃん』って呼ばれやがって…羨ましい。

『おう、俺は明。智則の所まで案内してくれないかな？』

「お兄ちゃんは今出掛けちゃってます。それより！さっき落ちた人を助けに行かないと！」

匠の事を思い出した様にハッと気付くユキちゃん。

『うん、ってか最初は俺と匠以外にあと四人いたんだけどみんな落とし穴に落ちちゃってね。それより…落ちるとどうなるの？』

「私も詳しくは分からないんですけど…複雑な迷路になってるみたいで、奇妙な動物みたいのもたくさんいて…」

結構ヤバイですね。さすがボンボンの家は地下にまで無駄に金を掛けてらっしゃる。

こうして俺はみんなを助けるためにユキちゃんに案内され地下へと続くといわれる階段を降りていった。

第21話　さ、行きますよー

俺達はまず、最初に落ちてしまった正美と友美ちゃんを助けに行く事にした。

何でも簡単な場所…つまり物を盗ろうとした時に発動する落とし穴の行方はそうたいした罰はないらしい。

だからユキちゃんの部屋から落ちた匠の行方なんて、きっと大変な事になっているだろうな。

「壁に飾ってある物を触ったら落ちたんですね？なら、この第二の部屋です」

地下の階段を折りると鍵と鎖が頑丈に掛けられたドアがあった。何とも不気味なオーラが感じられる。

「ここは任せて下さい」

そう言ったユキちゃんは二本の針がねを取り出し慣れた手つきで鍵を外していく。…って、おかしいだろ！

さすがコメディー、何でも有りだな。

ギギッと錆びた音がしてドアが開いた。中は暗くて何も見えなかったから、俺が持っていたジッポの火を蠟燭に付けて辺りを照らした。しかし視界が悪い。しかも怖い！！

「……怖い…かも」ユキちゃんが俺の服の裾をキュッと握ってきた。

ウヒョヒョゝ思わずニヤけちゃうぜ

『僕の事もお兄ちゃんって呼んでくれないか?』

「…え!? お兄ちゃん…」

萌ええゝ!!

さあ、俺に怖い物など何もない。

「キャ、今あつちで何か光った!」

フフ、大丈夫さ。何も怖くないさ。ちょっぴり濡れた股間は気のせいなのさ。

「ち…近づいてきますよ?」

そついや設定古くて忘れてたけど…

「キャー」

俺、幽霊とか苦手だったね…。

第22話　輝け世界の明

「明…！明あー！」

…誰かに呼ばれている気がする。俺は、どうなったんだっけ…真っ暗な部屋。

そうだ、俺は追っ掛けのファンに捕まった。全く、そんな部屋に無理矢理誘わなくっても良いのに。真っ暗な部屋は恥ずかしがり屋さんなのかな？

電気を消した時にすっかり寝てしまっなんて俺としたことが…。

さあ、俺はいつでもOKだぜ。熱い夜にしようじゃないか。

ムムっ、かすかに見えるあの光は蝋燭か！？

まさか…いきなりそんなプレイを求める気なのか！？

変な三角の椅子に座らされて変なムチで叩かれて

「気持ち良いか？」

なんて聞かれたらどうしよう…。

そんなもん…気持ち良いに決まってるじゃねえか！！

「いい加減起きろ！」

『ぐはあッ！』

腹に激痛が走り意識が返った俺の目には、リョータの姿があった。

『嘘だろ！？俺はリョータと禁断の階段を上ってしまったのか！？
…もういいさ、開き直ってやる！さぁリョータ…好きにしたまえ』

「何気持ち悪い事言っただけだテメエは！」

もう一発腹に鉄拳をもらった俺はようやく地下に落ちた皆を助けに来た事に思い出した。

まあ、こんだけ更新が遅かったら忘れるよね。

やはり匠以外が落ちた部屋はいつしよで携帯のライトを頼りに舞達と友美ちゃん達は合流したみたいだ。

「相変わらず怖いのが嫌いなんだな、明は…」

『怖くなんかねえよ、ただちょっと恐かったただだよ！』

「漢字違っただけで意味大体いつしよだから！」

「はいはい、お決まりの漫才は良いから。あとは匠だけね、無事でいてくれればいいけど」

舞に止められた俺達はようやく匠を助け出す事になった。

「とりあえず一旦出しましょう。匠さんの落ちた部屋はここからは行けませんから」

今はユキちゃんだけが頼りだ。俺達一同は第二の部屋を後にした。

途中で、人の骸骨みたいな物体が目映ったがきつと気のせいだろう。

決して脱出できずに飢え死にしたなんてありえないのさ。

「また失神するなよ？ストーリーが進まないからな」

今はリョータに反論する余裕もない。一刻も早く出たい。

俺のこの思いが作者に通じてか、それとも場繋ぎができる程の文章力がないためか、あっさり外に出た。

しかし、匠の部屋に行く事が真の恐怖の幕開けとは…誰も気付かなかった。

第23話　脱出不可能だつて、ただけないぜ

「渡嘉敷！（とかしき）お前ともあろう者がなんて失態だ！侵入者を取り逃すなんて！」

「いえ、坊ちやま。侵入者ではなく明様一行のお友達では…？」

「勝手に門を開けたぐらいで警報機が鳴るか！センサーの発信元はもつと別の所から…つて、なんだその地球儀は！？」

「いや…これは武器かと思ひ…。では、他にも侵入者がいると言う事に…」

「明、匠…無事でいてくれ」

――――。

俺達一同はユキちゃんに連れられて、匠が落ちたと言われる部屋まで来た。

やはり慣れた手つきで鍵を外したユキちゃん。今度はコンパクトパソコンを取り出してケーブルを繋ぎ凄いスピードでキーを叩いていく。画面に大きくOKの文字が出るとカチッとロックが外れた音が出てドアが開いた。ここまで来ると何からツツコンでいいのか分からない。

中に入ると部屋はさつきと違い明るかった。10畳くらいの狭い空

間を中心に匠が倒れていた。

『……匠!!』

みんなで匠の元に駆け寄るとガチャンとドアを閉められた。

『…え？ユキちゃん??』

…閉じ込められた？

『おい、冗談でしょ？早く開けてよ』

「残念だけど無理ね。色々助かったわよ、私が鳴らした警報機もあなた達のせいになったおかげで警備も薄かったし」

何言ってるんだこいつ？

「あなたが気を失った時に閉じ込めても良かったけど…皆まとまっていた方が都合が良いし、しかもこの部屋は外から暗証番号を入れるの。じゃあ、私はさっさと財産を手に入れてくるわ。そろそろ私の存在にも気付く頃だろうし」

そう言い残してユキちゃんは行ってしまった。確かに、俺は馬鹿だ。あれだけ器用に鍵を外したら疑っても良いだろう。

それより匠だ。小さい頃から智則と遊んでいる匠なら脱出方法を知っているかもしれない。

『匠！起きろ!!』

「う…ん、ハッ、馬鹿な！俺は明と禁断の階段を上ってしまったのか！？…もういいさ、開き直ってやる。…さあ、好きにしたまえ」

『同じ妄想してんじゃねえ！』

俺は匠の腹に全身全霊の力を込めた正拳付きをぶっ放した。

「ぐはあ、…ん？ココは…地下の部屋か」

『そつだ、どうやれば脱出できる？』

「任せなさいよ明君。前にもし落ちた時の脱出方法を教えてもらった事がある。この隅から2番目の床の板を外せばボタンが…」

うお、さすがだ匠。今の匠は輝いてるぜ。

「あつたあつた、ポチつとな」

くシュウウウく

あれく、おかしいなあ。なんか壁のから煙が出てきたよ？

しかもなんか苦しいよ？

もしかこいつ間違った？

「…あ、そういえば脱出方法をなくして変わりに毒ガスになったの忘れてた」

忘れるなよ、そんな事！

ヤベエぞ、何せこの部屋は真空状態の密室。たちまち煙が部屋中を

覆ってしまった。

「苦しい」

「うう……」

マズイな、もう皆限界だ。ドアは開かないし息もできないし……。さすがにこの状況はコメディーのノリじゃ乗り切れないぞ。俺も、もう……駄目か。

――脱出不可能。

第24話〱プランAはありませんが、何か？〱（前書き）

どうも、作者のタンポポです。年越しは忙しくて更新に遅れました。すいません…。それでも待っててくれた人（いるかな？）ありがとうございます。最近笑いの要素が少ないですが、見守ってくださ
い！

第24話　プランAはありませんが、何か？

もう部屋中が煙に覆われて真っ白で何も見えない。皆は、皆は無事なのか？

毒ガスが発生してから約5分、俺達はその間呼吸をしていない。

普段当たり前の様にしている事ができないと辛いとは、まさにこのことだ。

いつ意識が飛んでも可笑しくはない状態…と、言うよりも飛びますね。さようならあゝ。

「皆、無事か！？」

あきらめたその瞬間だった。智則がロックを解除してドアを開けてくれたのは。

この部屋が地下であつたために開いたドアから階段を通りみるみる吸い出される毒ガス。

徐々に視界も良くなりやつと呼吸ができた。

「すまない、暗証番号をハッキングするのに時間がかかった」

そんな事できる高校生がいるかよ。さすが超一流の企業の坊ちゃまだぜ。

『ゴホ…ハア、助かったぜ智則。俺は大丈…』

俺が最後まで台詞を言えなかったのは智則の表情が強張っていたからだ。嫌な悪漢が背筋を走り、智則の目線の先を見渡す。

最悪の事態。俺以外の奴ら全員が床に屈している。

『冗談だろ？笑えねえって……!!』

駄目：まるで駄目。誰も反応してくれない。

「落ち着け明、ここをどこだと思っている？我が家には超一流の医者がスタンバイされているんだ。本来、毒を浴びてもその対処が早ければ助かる」

智則の一言に救われた。まあ、これだけ大きな家だ。それくらいできても当然なのだろう。

「残念ながら、無理：ですな」

俺達の唯一の希望を見事に粉々に打ち砕く言葉を放ったのは、白衣を身に纏い、薄くなった頭皮、伸び放題で不潔そうなヒゲは白髪で、さらに白くなった眉毛は無造作に伸び、目が隠れている。ヨボヨボで艶と張りを失った肌には所々に黒いシミが目立つ。押したら飛んでいってしまうんじゃないかと心配するほど、か細い身体 of 老人だった。

「ドクター！？どういう事だ!？」

どうやらこの老人が俺達の希望そのもののドクターだった。なのにその老人に無理と言われては、理由を聞くまで納得いくわけがない。

「お気づきでないと…？一年前…いや、今までの事を思い出してみなされよ」

一年前？ 智則がこの街を去ったあの頃だ。深く考えている様子だった智則だが解らないと言う表情を浮かべている。

「まあ、人を人とも思わず、機械のように扱い、すぐに新しい人材を雇う。そんな親子ならば仕方がない」

「何が言いたい…？」

「考えてもみる、一年前と同じ顔触れの使用人がいるか？優秀な人がいると情報が入ればすぐに入れ換えられる。例えばどんなに勤めても…どんなに尽くしても…まるでゴミのようにポイだ！」

俺には深い事など、ましてや辛さなど分からない。…が、なぜか涙が出てきた。

「医療なら自信があつたのに解雇されたワシを雇ってくれたのは貴様らのライバル企業さ。そこでだ！貴様ら一家して屋敷を空けていたこの一年、間抜けな奴らに乗っとうと考えたのさ！この屋敷も！企業の権利も全てだ！！」

ワハハハと悪魔のように品のない高笑いをする老人に、先ほどまでの哀れみが消え、それがそのまま怒りに変わった。しかし、殴ろうとしたところを智則に止められる。

「さらにな、我々企業が送り込んだエージェントで、この屋敷は埋まっているのさ」

気が付けば、俺達がこの家に入る時鳴らした非常ベルに駆け付けた使用人がざっと三十人、その全員が老人の後ろに立っていた。

同く重装歩兵が十人、射撃班が十人、二等兵が十人。こいつらが持つている剣や銃はおそらく本物だろう。向けられた銃口から重い冷たさを感じる。

「…馬鹿が」

この絶対絶命の状況でも智則は何か逆転の策があるように笑った。この表情が出るからにはマズイと察知した老人は表情をしかめる。

「確かに入れ替えは頻繁にしてきた。だが…渡嘉敷だけは違う。俺が生まれた時から育ててもらった渡嘉敷が…この屋敷を裏切るものか！」

「ほう…それはどうかな？」

そんなものか…そう言わんばかりの老人の言葉に今度は智則と表情が逆転する。

「遅れました…」

「渡嘉敷…！」

渡嘉敷と呼ばれた男は、老人の裏に付いた。この瞬間、渡嘉敷は向こうの企業側に買収された人間の一人だったことが判明した。

その事実がショックなだろう。万策尽きた智則は言葉を発する事

ができず、床に膝を付け座り込んだ。

渡嘉敷は雪ちゃんといっしょにいた。全てが繋がった時だった。

「坊ちやま…この私が裏切るとでも？」

パツと智則が顔を上げた時には渡嘉敷が老人の頭を殴っていた。…
例の地球儀で。

「こうするしかこの屋敷を守る手段はありませんでした。貴方達一家がいないこの屋敷を守る手段は…」

渡嘉敷はずっと味方だった。敵の作戦を見抜くために寝返ったふりをする、最善の戦略だったのだろう。

「な…あんた達、行きなさい」

リーダー格は老人の他にもいた。雪ちゃんだ。その合図と共に射撃班が一斉に攻撃を仕掛ける。

渡嘉敷は鎧を着ているからダメージをくらう事はない。銃の威力もかなりの物なのだが、何せ鎧が頑丈すぎる。傷一つ付いていない。

しかし俺はというとそんな物はなく、まさに無防備。ターゲットは渡嘉敷から俺へと変わった。

渡嘉敷がその事に気付き、俺を庇おうと駆け付けてくれるが遅かった。

銃口を向けられ鼓膜を刺激する音、ああ……死ぬ……！

……あれ、平気だ。痛みがない。強くつぶった瞼を開けてみると目の前には二人の重装歩兵が銃弾を弾いてくれていた。鉄仮面を被っているため、顔を把握する事ができない。……誰だ？

「くっ、お前達もか……二等兵、重装歩兵！」

雪ちゃんの合図と共に盾と剣を持った兵士が突っ込んで来る。その数ザッと二十人。

「償うべきだな……」

銃弾を弾いてくれた二人の重装歩兵はそう呟いた。前に出て、渡嘉敷側に付く。またしても寝返りの裏を書いた戦略。

「俺達を忘れちゃいないだろう？ 明」

忘れるはずがない。その声、拓哉だろう？

「刑務所を出た後、渡嘉敷さんに拾われてな。すっかり更正したよ。俺が犯した罪がこんなので消えるなんて思っちゃいないが……これからは尽くさせてもらいます。智則……いえ、坊ちゃま」

その声は和也さんか。

俺はリョータが握っていた短剣を手に取った。これはリョータが落ちた時から持っていた唯一の武器である。

『プランB!!』

俺の声に体が思わず反応して陣形を取った拓哉と和也さん。

その陣形とは俺がリユーファを仕切っていた頃に、少人数の時大人数に囲まれた時の対処方だった。

背中を寄り添うように構え、どの方向からの攻撃にも備えられる。

向かってきた奴らがたとえ何人だろうと…

『よく覚えてたな』

「当たり前だろう。いつもこれで乗り越えてきたじゃねえか」

向かってきた奴らがたとえ何人だろうと…

自力でブチのめせ!!
それがプランBだ!!

第25話　飲んでえ騒いでイジられてえ

「今日は皆に迷惑をかけちゃってゴメンな。お詫びにこちらでパーティーの準備をさせてもらったよ。…じゃあ、カンパニー」

「……カンパニー……」

と、言うわけで始まりましたよ智則君家パーティーが。

なんかもう豪華な料理が盛り沢山で腹の虫が悲鳴をあげている。今なら獣になれそうだ。

さつそく料理に手をつけようと箸を伸ばした。

が、箸はコロコロとテーブルに転がった。いや、別にそうゆう年頃ではない。

「明、包帯グルグルに巻いてんだから無理だよ」

そう、俺の右手は怪我をした。けど幸い、大事には至らないらしい。

まさか本気で高校生相手に本物の剣使うなんて思わないじゃん。

「ゴメンな明。俺の部下達が…」

『気にするなよ智則。皆戻ってくれて良かったじゃないか』

「それは君達のおかげだよ」

あの子の事は興奮しすぎてよく覚えていないが、プランBは成功し

たようだ。

部下の人達は降参して、また智則の家来として働きたいと言っていた。

この時代プー（無職）は嫌なのだろう。
意識を取り戻したドクターに俺達は治療をしてもらった。

俺の手の怪我や、わずかながら毒を吸い込んでしまった皆に解毒剤など、適切な処置をしてくれた。

一つ気掛かりなのはユキちゃんだ。騒動の時に既に姿はなく、行方はドクターですら分からなかった。

「なあゝにマジ顔になっちゃって？ キヤハハ、真面目な話は終わりにしようゝ」

とか言いながら舞が抱き着いてきた。うん、こはあるな。

『やめろ舞！…つてか酒くせえ！！』

テーブルの上にはワインやら焼酎が空いていた。匠もリョータも友美ちゃんも正美も酔っ払ってやがる。

まあ元から酒飲む予定だったから良いんだけどね。

それにしても豪華なパーティーになりましたね。

「てめえ明！舞に手え出すなあゝ」

はい、突っ掛かってきましたよりョータが。

『寝てた奴には言われたくないセリフだな…リョータ君』

「まあまあ、こんなめでたい席だ。決着はこれで着けなさい」

匠がそう言って俺達に酒を勧めてきた。いわゆる飲み比べと言っやつだ。

自慢じゃないが俺は酒がかなり弱い方だ。ぶっちゃけ勝つ自信がない。

「まずは俺様から飲むぜ！どの酒を飲めば良い！？」

テーブルの上には色々な種類の酒があり、かなり迷う。中には名産物や聞いた事もない名前のラベルがある。

『ん…まずはこの辺だろ』

俺はアルコールがかなり弱いチューハイを渡した。

リョータがコップ一杯に注ぎ一気に飲み干す。

「そんなヤワな酒では、この体を酔わす事など出来ぬわ！」

ピーン…ドゴン！

うん、たぶん理解できた読者は少ないよね。

「明の酒はこいつだ！」

リョータが出してきたのは…ウォッカ！？ しかも割らずに！？

くっ…こいつはきついぞ。ってか順序つてもんを考える！

「チャ～チャチャ～チャチャンドンゴン　あなたの事が好きだからあゝ」

俺がコップを持って戸惑っていると皆から一斉にコールがかかった。

これは飲み切らなくては場が白けちまう。

『うおおお！』

俺は一気に飲み干した。そして酔った。

中学の頃から酒は苦手な俺は酔うと我を忘れてしまつらしい。しかも、後の事は覚えていないという質の悪さだ。

でも俺視点でやるよ？　だって話進まないし？　ってか俺目立ちたいしみたいなの？

『ヒヤハハハ！リョータの酒はこれだあゝ』

俺はテーブルの上の酒全種類を混ぜたジョッキを渡した。

『チョメ混ぜDXだ！』

「てめ…ドリンクバーじゃあるまいし、こんな事…」

さすがのリョータ君も戸惑ってるようだね。だって、なんかゴポゴポいつてるし変なの浮いてるもん。ホント、俺っては何混ぜたんだ

ろうね？

しかめつつらをしたりョータだったが、一気に飲み干した。そして吐いた。

「ぬっ…俺様は拳王！拳王は決して、膝など地につかぬ！」

なんてセリフパクつときながら膝がガクガク震えてますよ？

そして知らない読者はキョトンだぜ。

『はい ご馳走様が、聞こえない』

俺は再びゴチャ混ぜの酒をリョータに渡した。

「え？次は明の番じゃ…」

「「「ご馳走様が聞こえない」「」」

わぁ 皆、悪ノリ大好きだね。

「う…うわぁぁ！」

おお、飲んだよこいつ。

『はい ご馳走様が…』

結局この酒を20連チャンで飲んだリョータは見事昇天。胃に穴が空いてるのに右手を掲げて天に帰って逝きました。

知らない人、そしてパクツてゴメンなさい。まあ、コメディイからです。

理解したい人は、お金を持ってホールに行つて椅子に座つてボタンを押してみな。新たな刺激が君を魅了するはずさ！

でも、十八歳未満の人はパパとママには内緒だぜ！？

「さて明君、そろそろお楽しみタイムといきますか！」

『そうですな匠君』

「王様ゲーム！」

まあ男女の高校生が集まって酒飲んだら定番でしょ。むしろやらなきゃヘタレでしょ。

「面白いわね、やろつよ、友美、正美」

「え…私こうゆうの苦手で…」

「大丈夫よ、酔っちゃえばどうにでもなるって！」

ふっ…こうなる事も計算ずくさ。舞に勧められちゃ、さすがに友美ちゃんでも断れないだろう。

王様ゲーム…それは数字と王様と書かれたクジを引き、見事王様を引いた人が何でも命令して良いと言われる禁断のゲーム。

もちろんこのゲーム、男女で…しかも酔ってる時にやればムフフな展開が待っている。

身近にクジになりそうな物がなかったのでタバコにペンで数字と王の字を書き入れる。

それぞれがフィルターを掴み…

『じゃあ行くよ。王様であゝれ…』

「待て！俺様もやる…。てめえら…舞に手えだすんじゃねえぞ…」

本当に場の空気を乱す男だね、リョータ君は。おとなしく寝てればいいのに。

『じゃあ、改めて…王様であゝれだ？』

俺の手から一斉にタバコがそれぞれの手に渡る。

「はあゝい 私が王様！」

第一ラウンドを制したのは舞だった。

俺の数字は2番だ。さて、誰に何を命令するのやら。この瞬間がドキドキですな。

…ん？ あっ！ リョータの奴、こっそりと舞に自分の数字を教えてやがる！

けー、あい、えす、えす、K i s sですか？ 皆の前で見せびらかすつもりですか？

「1番の人がー…」

リョータ、ニヤニヤしてるもん。あいつ絶対1番だよ。ってか、こんなの反則だよ。

「王様の足元に落ちたコンタクトレンズを探す」

あれ、K i s sじゃない。リョータも

「はて？」

って顔してるよ。

椅子に座った舞の足元をリョータがひざまづいて探す。

「ホッホッホッホ」

舞の突然の高笑い。これには一同、

「そういう事か」

とア然。

まあ、あれですよ。男を奴隷にした女王様って奴ですよ。

そっついえば変だもんね。女の子がいるのに

「王様ゲーム」

って。明らかに男の下心丸見えのゲームですもんね。

さ、リョータの事を指差して腹抱えて笑ったことだし、次行きますか。

再びタバコを回収してシャッフルする。フィルターの部分を手から出し、皆が一本選択。

でもメツチャ、リョータの手に力入ってるんですけど。フィルターから綿飛び出てますけど。そんなに王様になりたいのかな？

今回のイジられキャラは君な事まだ気付かないのかな？

『王様であゝれだ』

どうせコメディーのノリ的に俺がキングでしょ？ で、リョータをイジれば良いんでしょ？ まかせなさいよ。見なくても分かる…俺のタバコには王の文字が…

「俺がキングだあ！！」

あれ！？ リョータが王様！？ ば…馬鹿な。

「まずは明が…」

『いや、おかしいだろ！王様ゲームでなんで名指しなの！？』

「王様の言う事はあゝ？」

「」「絶対」「」

うわあゝ皆悪ノリ好きだもんね。今はその笑顔が悪魔に見えるよ。デモンだよ。

デーモンって言ったらお前スゲーよ？

道端で必死に咲いてる花でも踏み潰すかね。

「飲み比べじゃ酷い目に会ったからな。どんな事をさせようかな…
フフフ」

もおりヨータなんか嫌いだよ。お前なんかデーモンの上をいくサターンだ！

サターンって言ったらお前スゲーよ？

奴はアサガオの前に仁王立ちして朝日を浴びせないかね！

「あれ？こんな所に偶然にも用意されてたチヨメ混ぜDXが？さあ、
飲みたまえ」

『ああ飲むさ！飲んでやるよチクシヨー！』

俺は震える手で酒を口に運ぶ。

ドロン…とノド通しの悪い感覚。これはもはや液体飲料ではなく物
体や固体の部類だ。

吐き気を押さえ何とか二口目を飲み込んだ所で挫折です。無理です
よ、そりゃ。

もうルールもクソもあるか。こうなったらメチャクチャにしてやる
ぜ。

『三回戦突入！さあ、早く選べ！！』

「…馬鹿が。クジを持つてる奴に選ぶ権利はない。さっき俺様が掴んだ フィルターから綿が出てるタバコ …つまり、これが王様なんだよ！」

ニヤリと笑ったリョータが王と書かれたタバコをゲットした。

「よし、俺様が王様」

『じゃあ、俺は神様』

「なぜ！？つてか神様つて何だよ！」

『俺はキングの上に行く存在さ。とりあえず命令、全員酒一気飲みだ！』

—————。

さて、あれからどれだけ飲んだらうか。一人頭ジョッキ10杯は飲んだんじゃねえか？

全員顔真っ赤、理性も吹っ飛んでるぜ。

「ハハハハ、明君。世の中は金が物を言うのだよ」

智則もついに素が出たか。ポケットから取り出した万札をばらまき始めたよ。

「キャ　しゃちゃん凄いい」

友美ちゃん、君は初期設定から今まで清純派女子高生で来たんだよ？

だからそのキャバ嬢みたいな口調とポーズはやめなさい。

「ウヒョヒョ、明、お前の顔ウヒョヒョ」

リョータ、君に笑顔は似合わないから。キャラ変わりすぎだろ。

まあ、正美も舞もイジるの面倒だから省略。

匠はいつも同じ髪型だし、いつも同じ服装だし、いつも同じ顔だもん。つまんねえよボンクラ。

「いや、顔はしょうがないよね!？」

明日から学校なのに大丈夫かな、こいつら。

ま、これにて智則家編は終了だよ。

「誰と喋ってんのよ、あんた」

…ふ、それはこの神である俺をも凌ぐ、画面の前のゼウスとき。

そっぴや忘れてたぜ。俺、酒弱いんだ。

さ、早く終わらすか。ゼウスに俺達の嘔吐物を見られる前…

『ゲエエエエロロ!』

……ゴメンなさい。

第26話　いつもより余計に匠をイジっております

さあて今日もヒマだぜ。いやね、智則編も終わって次のネタ探すまで休んで良いよ。って言われたんだけどやっぱヒマ…え？ あ、こういう事言っちゃいけないの？

ふう、いよいよヒマ人だ。仕方ない、ゲームでもやるかな。

言つとくが俺のゲームの腕前はかなりの物だぜ。

格ゲーやシューティングはもちろん。脱衣麻雀で毎晩ニヤニヤしてるし、恋愛ゲームじゃ俺はお兄ちゃんだ。…いや、最後のは忘れてくれ。

最近ハマッてるのが育成だね。その名もチョメットモンスター。縮めてチョメモン。

内容は極めて簡単。自分がマスターとなりモンスター同士を戦わせ、育てていくやつだ。

敵として出てきたモンスターを捕まえれば、自分で育てる事ができる。

しかし、それも全クリしてしまった。そのため、今までずっとレベルを上げてた。全クリしたゲームの。マジつまんねえ。

もはや俺のモンスターは最強レベルだ。

とりあえず物語が始まる最初の町へ帰ってきた。

草むらからモンスターが飛び出してくる。

LV：99の俺のモンスター。

LV：2の全キャラ中最弱モンスター。

俺はそのモンスターを捕まえると、ニックネームをつけた。

タクミ

そのモンスターを連れてラスボスへ。

『ハーハッハッ！タクミが死にやがった！マジ使えねえ！』

でもアイテムでタクミは復活する。

『アーハッハッ！最高だよタクミ！お前の防御力であの攻撃に耐えられんの？無理だよ！粉砕だよ！でもアイテムで復活だから！お前の一生は生き地獄だから！ウヒヤヒヤア』

ふう、飽きた。

しかしこんな事を徹夜でやってる俺ってどうよ？

お天道様も出てきて今日は良い天気だ。少し寒いけどね。

あ、そうだ。学校でも行くかな。

俺は携帯を手にして匠に電話をかける。

『匠いゝ？今ヒマあ？』

「おおゝ。かなりヒマ」

『学校行かね？』

「お、良いねえ。じゃ智則でも誘うか」

なんて高校生として当たり前前の会話を済まし、匠と智則が俺ん家まで迎えに来た。

『よし、行くか！』

「「おう」」

俺、匠、智則の三人はに学校へ向かうため駅へと向かっていた。

こうして友達同士で登校できる。ましてやこの三人でだ。一年前の俺としては考えられない事だ。

他愛もない話したが、これが友情なんだよね。

なんか今回の俺ってカッコ良くない？

…なんて、自分に浸ってる内に学校到着。

今更だが俺達を通う高校は『かんばし駅から一駅隣高校』だ。なんとも読者に分かりやすい名前なこと。

ちなみに舞とリョータは『かんばし駅から二駅隣高校』だよ。

学校は三階建てで共学。校舎は小さいのに校庭が広いのが我が校の特徴だ。

しかも階段がかなり急ときている。男子諸君、これがどういう意味か分かるかな？

そう、スカートが短い子が前にいればパラダイスなのさ。

しかも今まさにその状況。さらにその子は可愛いときてるもんだから、オヂサン嬉しいよ。

その娘は後ろに俺達がいるなど知らず、やや小走り気味に階段を上がる。朝から何か嬉しい事でもあったのだろうか。

その度に揺れるスカートがチラリズムだぜ。

……………チラ。

よし、紫のレース、チェック完了だ。
ごちそうさまでした。

『匠がパンツ見てるぞ！』
「バ…見てねえよ！」

フツ、匠よ。今のお前の台詞は失敗だぜ？ なぜならお前が 匠
という事が女の子にバレてしまったのだから。

黙っておけば誰が匠だろう？ ってなったかもしれないというのに。

ほら、女の子が振り向いて匠の事を凄いガン付けてるよ。

『全く…いい加減にしてくださいよ？パンツ隊長』

「誰だよパンツ隊長って！」

『あとそれから…女の子に パンティいくら？ って聞くのも辞めて下さいよ？パンツ隊長』

「言った事ねえよ！」

はい、お約束通り、匠がビンタされました。

そして教室に到着。そういえば、もうそろそろ俺達も高二になるのか。思えばこの教室に初めて入ったのが第二話だったな。

『おはよお、たく』

「そのネタ二話で使ったから！」

『てめえ あんま調子こいたツツコミだと 腕ひきちぎるかな？』

「伏せ文字ズレてるよ！？グロいから！」

…と、まあ教室に入る時は俺達はいつもこんな感じなのさ。

「ん？おお、久しぶりじゃないか。明、匠。それに智則の話も聞いてるぞ」

もう本当に久しぶりですね山崎先生。

「てつきりもう来ないと思ってたよ。で、今更何しにきたんだ？」

『ハッハッハッ、全く…冗談は顔だけにして下さいよ』

「ハッハッハッ、いや…冗談じゃなくて。お前ら三人は単位足りないから進級できないよ?」

「「な…なにー!?」」

まあ確かに、最後に学校来たのかなり前だもんね。半年以上行かなかったら、そりゃ単位不足ですね。

そもそも作者の更新が遅いんだよ! 今度道端でタンポポが咲いてるの見かけたら踏み潰してやる!

「先生、これで行くのか」

そう言いながら智則が札束をポンと先生に渡した。先生はそれはもう嬉しそうに札束を数え始めたよ。

「智則は入院してたんだし仕方ないか。免除!」

ああ…俺は今、教師の見てはいけない姿を見てしまった様だ。

「おはようございます」

「おはケロお」

『あ、友美ちゃん! 正美! 大変だよ。俺達、単位が足りないから進級できないって』

「はい? 私はちゃんと学校来てましたよ? 中盤は出番もなかった事

ですし…」

わあい、ゴメンね。

そして今まで目立ち過ぎた自分が憎いぜ。…フツ。

「ウチも単位足りなかったけど、山崎にパンツ見せたら許してくれたケロ」

んなコト暴露すんじゃないよ。匠が泣いてるぞ？

「…ゴホン、どうでもいいが…二人はどうする？方法はなくもないが…？」

「何でもやります。だから何とか…！」

「ふむ、では明と匠には私の作る映画の手伝いをしてもらおう」

まだ作ってたんですね。

…と、言う訳で俺達は進級を賭け、山崎先生の手伝いをする事になりました。

—————。

「さて、時刻は午後四時。授業を終えた生徒は下校し、あんなに賑やかだったこの教室には私達しかいなかったわけだ」

場面が切り替わっての状況の説明、ありがとうございます。

それにしてもいつの間にか教室にはバカでかいカメラや照明スポット、さらには音声マイクと……ってか、こいつ教師辞めろ。

とにかく大掛かりなセットをよくも揃えたもんだ。

「欲しかったんだよなあ、この 誰でも簡単 映画監督セット。さつき智則から貰った……ゴホン、こつこつ貯めた貯金で……」

今チラツと真実が聞こえました。

ってか 誰でも簡単 映画監督セット って何だよ。

「さ、撮るぞぉ」

『はぁ……い……って、俺と匠が出るの！？』

「当たり前だ。匠は学生服のまま、明の衣装はこれだ」

そう言っただけ渡された紙袋の中には衣類の感触。

まさか俺が映画に出演できるとは……ああ、スターになったらどうしよう。

（キャー イケメン天才スターの明様だ！）

（本当だ！マジ格好良いんだけど！明日告白するから！）

なんて事になるだろう。ウヒョヒョ

って事を期待し、衣装着ました。はい、なんでセーラー服なんですか？

「女子高生を見ていたら…完結編だ！」

嘘おゝん。

忘れている読者は第七話辺りを読んでくれ。

「…ふつ、お似合いだよ。明ちゃん」

ちぎるぞ匠。

窓ガラスに映った俺の姿はまさに格好だけ女の子。

俺の髪型は、分けた前髪は毛先を口でくわえられる長さだし、襟足も肩で遊ぶ程。

全体的に長いため、女の子と偽れる。

ちやつかりメイクまでされ、恥ずかしさのあまり赤くなった頬、スカートは短めで男なのに下着が見えていないかと心配するモジモジとした行動は、清纯派女子高生…と言った所か。

ってか俺男じゃん？

萌えねえよちくしょ。

「結構可愛くなったな。よし、じゃあまずは匠が明に告白して抱き

着くシーンから…」

『待てやコラアア!!』

匠に？ むりムリ無理！
マジきもいから。

「え…良いの？……ポツ」

匠も何ちよつと照れてんだよ！

『こんなん嫌だからな!』

セーラー服を脱ごうとした俺に山崎先生がニヤリと笑う。

「留年？or退学？」

『やりやあ良いんだろチクショーが!』

もうプライドも糞もねえぜ。

母さん、腹を痛めてまで生んでくれた息子は今、女の子です。母さん…ゴメンな。

しかし、山崎先生指導の下、深夜に及ぶ撮影は、見事に見回りに来た警備員に見つかり、翌日の新聞の見出しはこう書かれていた。

真夜中の指導！男子生徒にセーラー服を着せた教師は何を…！？

俺は泣いた。

第26話 いつもより余計に匠をイジっております（後書き）

更新が遅いのについて読んでくれてありがとうございます。本当に感謝してます。さて、実は私自身も進級できるか危ないです（

笑 学生の皆さん、ちゃんと学校は行った方が良いでしょう。

第27話 新キャラは一つ上!??

さて、前回も色々あったな。まあ、あの事件が原因で俺と匠は進級を許可されたわけだが…。

代わりに山崎がクビになってやんの。マジ爆笑してやったぜ。

まあ山崎は教師を辞めた事をきっかけに、本格的に映画監督としての第二の人生を歩み始めましたとさ。

めでたし。

と、いうわけで今日はかんばし駅から一駅隣高校の卒業式です。

って言うっても、二年の俺達には関係ないイベントだ。なにせチヨメディーには三年生のキャラいないもん。ぶっちゃけ、どうでもいいですわ。

しいて言うなら学校早く終わってラッキーみたいな？

あゝはいはい、どうせ俺はこんな性格ですよ。連載当初から悪役ですよ。

でも主人公だから！ ウヒヤヒヤア

—————。

はい、始まりました卒業式。いきなりですが爆睡こいてます僕。

だって校長の話ヒマなんだもん。卒業生の涙なんてコメディーにいないから。

「続きまして在校生代表挨拶。沖本明君、お願いします」

あ、はぁい。…って、ハアアア！？ 俺！？

しかも第一話ぶりに俺の苗字でちゃったよ。

「何でも山崎が辞める時に代表は明に頼むって言ったらしいよ？」

そうゆう事は先に言えよ匠。山崎の奴、絶対俺に恥かせようとしやがったな。

まあいいだろう。こんな卒業式、コメディーに変えてやるさ。

俺はさっそうとステージに上りマイクを握りしめた。

『アーユーファンキーレディー！！？？？』

……。

……。

はい、滑りましたあ。
ッルッルでございます。

わあ、卒業生及び、ピーティーエーの方を方を始め、会場全体の視線が痛いや。

いや、一人爆笑してるのがいた。誰だろう、俺の学年には見た事ない顔だが…先輩かな？

いやいや、なんで先輩が一番後ろで先生の横に立ってんの！？

もしや…あの人……

—————。

「おい明、あの挨拶はないだろ」

『匠が言うの遅いからだろ！もっと時間があれば面白い事が…』

「この失態は血で精算してもらっぞ」

『え！？智則ってこんなエグいキャラだったの？』

「でも卒業生の皆さん怒ってましたよ！」

『はい、ゴメンね友美ちゃん。そんな怒らないでよ』

「でもまあ、明らしいケロね」

『だまれ糞蛙。てめえに俺の何が分かる？』

「いやあよくやってくれたよ。あんな卒業式くそくらえだよな」
『ホントだよな……って』

「誰だあー！！！？」

ホント誰だよ前、何ちゃっかりと俺達の会話に自然と混ざってんの！？

って、こいつあの時笑ってた奴じゃん。…え？ 同じクラスだったの？

「おいおい、ノリ悪いぜ皆。これから一年間、同じクラスなんだから仲良くしようぜ！？…なあ、友美」

「……………！！」

え、何こいつ。友美ちゃんの知り合い？

「おっと、自己紹介がまだだったな。名前は大橋^{おおはし} 智貴^{ともき}。ぶつちやけ、留年生だ」

こいつダブったのかよ！

って事は一個上か。チヨメディー初^{はつめ}の年上キャラ登場です。

この急展開どうなるんだ？

「……………ニヤリ」

次回への伏線と思われる匠の意味深な笑み。しかし、これには全く意味はないぞ。

本当の伏線は友美ちゃんと智貴の関係です。

あれ、まだ終わりじゃないの？ 次回の伏線したよね。それともアンコール？

いやまいっとなあ。

「友美、相変わらず可愛いな。こっちに転校してきたんなら一言声かけてくれよ」

「私はあなたみたいな卑怯な人間とは喋りたくありません」

あれえ、僕が主役なのに無視され気味？

ってかこんな恐い顔した友美ちゃん初めて見たぞ。

ま…まさか智貴って奴は友美ちゃんの元カレ？

オチサンそんなの許さんぞ。オチサン怒っちゃうかんね。

『うちの友美とどうゆう関係だ!』

「あ、お父さん。俺は友美の彼氏です」

『君にお父さんと呼ばれる筋合いは………って、彼氏!?!』

元力どころか現在進行系でした。

「違いますよ!勝手な事言わないで下さい!」

何この過去に二人の間に何かありました的な展開は?

「あの後、私がどんなに辛かったか…」

「いや、だからそれは…」

「もういいです!」

ああ、友美ちゃんどっか行っちゃいましたよ。

『なあ、友美ちゃんと何があっただんだ?』

「…ん?ああ、実は俺もこの学校には転校してきてな。前の学校が友美と同じだったんだよ。まあ、皆に分かりやすい様に、次回は俺と友美視点でやるね」

本当の伏線は智貴君でした。

第28話 コメディーにこんな話は場違いな事くらい分かってるー (前書き)

友美視点…シリアス

智貴視点…コメディー

だ

と思って下さい。

第28話 コメディ―にこんな話は場違いな事くらい分かってる―

学校までの歩く道のり。決して近い距離ではないのに、あつという間に時間が経つのは行くのが嫌なのかな。

周りの皆は自転車通学。歩く私を地面に足を浸けずに楽して通り越して行く。

そりゃ私だって前は自転車通学だった。でも、さすがに四台も親に買ってもらうわけにもいかないでしょ？

置いておいた自転車を車にひかれた。
パンクしたから捨ててきちゃった。

遊び先で鍵を無くしたから置いてきたら次の日にはもう無かった。

苦しい言い訳だったけど何とか親はごまかせた。

それも全部嘘。本当は三台とも壊された。だから今日も歩いての登校。

「遅刻するぞ友美！後ろ乗ってけ！」

こんな私に唯一話し掛けてくるのは智貴先輩。

彼は一つ年上の陸上部。入学した時に憧れて私は陸上部のマネージヤーになった。すぐに親しみ、今じゃ智くんと呼んでいる。

でも、それが全ての原因。

「いえ、結構です」

本当は乗りたかった。だって好きだから。でも、智くんは女の子から人気があるんだ。私が智くんが仲良くしているのを気に入らない女生徒に、いつも嫌がらせをされる。

自転車を壊した犯人もきつとそうだろう。

だから智くんの前ではいつも、本音とは逆さまの事しか口に出せなかった。

「いいから、ほら」

「え？ちよっ…キャ」

智くんは強引に私の手を引いた。照れながらも荷台に腰掛け、肩に捕まり、背中に身を預けた。

凄く…幸せだ。

――――。

教室に入ると床に散らかった教科書。乱れた机と椅子。間違いなく私のだ。

「あんだ、頭良いんだから教科書なんかいらないでしょ？」

女生徒の表裏一体となる団結力が、この嫌がらせを先生にバレる事なく継続させた。

「今朝見ちゃった。智貴先輩と二人乗りしてるの。…知ってる？二人乗りって罪になるのよ？」

知ってるわよ。でもあんた達のこの行為は罪じゃないって言うのかしら。

この学校は共学だけどクラスは全部で五クラスの二校舎。

第一校舎には主に男子が。第二校舎には私達女子の教室がある。

これは五クラス全てが異なった専門の学科なので仕方ない事だが、最悪な事に私のクラスの学科は食品と言って、女子専用の学科のため、男子がいない。

つまり、クラスの全員が敵なのだ。

男同士の喧嘩ならその後友情が芽生えるケースも少なからずあると聞くが、女は質が悪い。

我が身が可愛い女は表向きな行動は一切せずに陰から嫌がらせをする。

基本的に女の子同士は、初対面の人でもすぐに仲良くなれるが、一度友情が崩れると修復が効かないという欠点もある。

もう嫌がらせは慣れた。

何度も強がってはみるものの、痛みや寂しさ、悲しみは慣れるものじゃない。

この日は特に苛立っていたから朝のHRが始まる前に教室を出て、そのまま帰路についた。

幸せと不幸の極端な繰り返しに、精神が不安定になっていた。

そんな時に公園にたまっていた同じ学校の制服を着た高校生が。俗にいう不良だ。

いつもここにたまっているのは知っていたが、この公園を通らなければ家に帰れないのだから仕方がない。

「ちょ…あの娘可愛くねえ？」

「マジだ！おい、ノリオ、行つてこいや」

「ウツス！」

三人組の不良の一人がこっちに近づいてきた。

「なあ、俺らと遊ばねえ？」

ドカンと呼ばれるダボダボのスポンに両手をポケットに入れ、短ラと呼ばれる短い学生服を着て、肩で風を切るように歩いてきた。

「いや、昭和の方ですか？今は平成ですよ？」

私はニツコリと笑ってその場を立ち去ろうとしたが、腕をガッチリと掴まれた。

「てめえ…ちょっと来いやあー!!」

所詮、女の力じゃ男には勝てないのは分かっている。
でも…ずいぶん悔しい話じゃない。

性別が違っただけで不運に勝てないなんてさ。

それにしてもこんな展開は漫画の中だけかと思ってたのに…実際に
目の前で起きてるんだから否定はできないですね。

ハハ…私、どうなるんだろう…？

……………。

くはぁ…眠い。もうお昼か。午前中の授業の記憶なんてありません
が何か？　って感じだぜ。

「智貴いゝ飯食おうぜ」

俺の名前を呼び昼食に誘ってくれている奴は、名前をあげてもしよ
うがない。クラスメイトAとしよう。

俺はA君と昼食を食べるべく、母親特製愛情弁当をとりだそうとバ
ックを開けた。

……………ない。

あ、俺…母さんいないんだった。

別に淋しくないもん。

腹に貯まれば食い物なんて購買で良いのさ。

「……………財布忘れた。」

はい、お約束ですよ。

「わりいA、ちょっと家帰って財布取ってくるわ」

「おう、…って、Aって俺の事!？」

昼休みに学校を抜け出し、自転車で家までの道を爆走する。

すると、どうでしょう？

公園で友美が柄の悪い野郎共に絡まれているじゃありませんか。

「こらあ君達、駄目じゃないか!女の子に暴力振るっちゃ!」

「…と、智くん…」

殴られたのか…乱れた制服を見ると相当辛い目に会いましたな。

「うつせえな!」

右頬に強い衝撃を受ける。どうやら俺まで殴られちゃったみたいだ。

「智くん!大丈夫…?」

何かが込み上げてくるのが自分でも分かった。

「ああゝあ…切れちゃった」

俺は我も忘れて三人組に殴りかかっていった。

――――。

「クスン…ウウ…」

「泣かないの！もう終わったんだから」

「だって…だってえ…」

「あの昭和のヤンキー達もどっか行っちゃったからさ！だから…もう泣かないで？智くん」

「……うん」

はい、ボコられました僕。だって相手三人よ？ 漫画じゃあるまいし勝てるかつつの。

「もう…無茶しないでよ？でも、助けようとしてくれて…ありがとう」

しかも女の子に慰められる俺ってどうよ？

…え？ あれ？ もう友美視点になるの？ ちょっと待って、最後に一発ギャグやらしてよ。

えーとえーと…… それゆけ！寝過ぎしちゃいました特急車！！

—————。

あら、智くんどうしたんだろ。ちょっと元気が出たと思ったのに急に落ち込んだじゃって。心の中でスベツたのかしら？

あの涙は傷の痛み？
それとも心の痛み？

でも、そんな落ち込んだ智くんの表情も好…って、私ったらこんな時に…恥ずかしいです。

「ねえ、喧嘩弱いのにどうして飛び出してきたの？普通なら、助けを呼びに行くんじゃない？」

「弱い…俺？」

あ、また落ち込んだじゃった。

「…さあ？好きだからじゃね？」

…え？ 好き…私を？

「ちょ…急にそんな事言われても…」

「喧嘩が」

そっちかい！ またベタな展開…。

「何怒ってんだよ友美？」

「別に怒ってません！」

「友美の事も好きだよ。誰よりも」

智くんはニツコリと笑った。その笑顔に心臓の鼓動が大きく、そして速くなった。

「…私も…智くんの事…」

好き。

「…え？」

言えなかった。

私の馬鹿。

智くんを直視できずに思わず上を見た。

屋根の上にはタンポポが咲いていた。

ありえない所にもちゃんと咲くんだね。

私の恋にも…花は咲くのかな？

私はそのタンポポをずっと見ていた。

次はちゃんと言おう。

――――。

だけど次の日、智くんは学校から姿を消した。

第29話　友美ちゃん、せっかく目立ってるトコ悪いんだけど君の話、長いんだ

智くんは親の仕事の都合で引っ越し、学校を転校してしまったらしい。

なぜその事を言わないで行ってしまったのだろう。一言いってくれればいいのに…。

…ズルいよ。

いなくなる直前になって告白してくるなんて。

私のこの気持ちはどうすれば良いの？

「ちょっと！本当はあんたのせいで智貴先輩は引っ越したんじゃないの？知ってるんだから、昨日、智貴先輩があんたを助けるために喧嘩して怪我したの！」

この精神が不安定な時に、さらに追い打ちをかけるかのような嫌がらせ。

智くんが転校したからといって、女子からの嫌がらせがなくなるわけではなかった。

むしろ、私が追い出した…など、ありもしない噂が広がり、さらに嫌がらせも厳しく多くなった。

「…うつせえな…いい加減にしろよ」

「え？今なんて…」

私は智くんのファンクラブのリーダーである奴を睨み付けた。

初めての反抗だけあって相手もかなりビビっている。

所詮、女は力に大きな差がないため、性格によって権力が決まる。

物事をはっきり言う、気の強い人は上位グループに所属される。

よって、私のように真面目でウジウジしてる性格は、そんな上位グループからの絶好のいじめられっ子だ。

でも、そんないじめられっ子の気が強くなればどうだろう。

高校生にもなって女同士で喧嘩なんてしたくないだろうし、仮に喧嘩になっても、先程言ったように、力に差はない。

こいつらいじめっ子は、勝率十割の事しかやらない連中だ。度胸はない。

五分の立場になった私と喧嘩しても勝率五割。

普通に考えれば低くも高くもないが、やる価値はある…と言った所か。

でもやらないんだよね、こいつらは。

いい子ちゃんを気取りたいから。

さすがに顔に傷ができれば先生にもバレるだろう。原因を辿っていけば、今までの悪事が全てバレるのだ。無理もない。

「この…調子に乗るのも…!!」

くパチンく

「痛い…？痛あーい！」

あゝあ、頬つぺたにビンタしただけなのに大袈裟に痛がっちゃって…しかも泣いちゃったよ。

なんだ、こいつらも皆弱虫じゃん。

なんで私は今までこんな奴らなんかにはビビってたんだろう。

「次は…」

私は次の目標を決めるとその娘の前まで歩いていった。
ターゲット

「…ヒッ」

くパチンく

次々と泣き始めるいじめっ子達。

私の顔は…たぶん笑っていた。

—————。

後日、先生から私に言い渡させたのは一週間の自宅謹慎。私は今までいじめられていた事は言わなかった。

だから謹慎は私一人。

理由も聞かれたけど黙っていた。

先生も言っていた。

「なんで君みたいに真面目な子が…」と。

親には酷く叱られた。

「恥ずかしくてお前などもう家族ではない!」

私の親は市長をやっており、私のせいでその名誉に傷がついたのだろつ。

兄も姉もいる私はお荷物なのだ。

そしてついに言われた…

「友美、明日からこの学校に行きなさい。住む所と生活費はこちらで支配する」

かんばし町から一駅隣高校？
ふざけた名前…。

――。

「と言う訳らしいケロよ」

なるほどなるほど、長かったですね。

あ、視点はチヨメディー主役の右も左も明様です。

友美ちゃんが俺達男には言いにくいだろうと思い、代わりに正美が聞いてきてくれたわけだ。

『だってよ、智貴。とつと告れや。読者の皆さんも真面目な話じゃ飽きるって』

「バツ…簡単に言うなよ！俺はチキンの智さんで有名なんだぞ！？」

ああ、出たよチキンの言い訳。

『じゃあ何である時は告れたんだよ？』

「そりやお前…見渡す限りの地平線の前じゃ二人の愛は激しく燃えるだろうが！」

意味わかんね。

いや、ちよつと待てよ…。

『ピンときた！匠、ちよつと耳貸せや……ひそひそ』

「なるほど！そりや面白い」

こうして俺達は智貴と友美ちゃんにドッキリサプライズの計画を実行するのであった。

—————。

作戦1、まずは二人の仲を確認しよう

「急に呼び出して…何？」

「はあ？明は友美が俺を呼んでたって言ってたけど？」

「違うわよ！匠さんは智く…いえ、智貴先輩が呼んでるって…」

そう、俺達は何とかこの二人をくつつけようとしている。

たまにはハッピーな展開も良いでしょ？

二人の様子を隠れて見守る俺達。さつき聞いちゃったもんね。友美ちゃんが『智くん』って…智くんって…

ああちくしょう！

あんな可愛い子からつらやましい！！

『匠！作戦2行くぞ！』

「早いな！！」

作戦2、あの日のラブを返してよ！！！！

これは至って簡単な作戦。つまり、友美ちゃんが絡まれた時の状況を俺達で作ればもうその場の流れでイけるはずさ。

俺達はヤンキー風のファッションにマスクとサングラスで顔を隠し変装した。

これならバレないだろう。

「へーい その彼女！ホテル行かない？」

それは汚いぞ、匠。

「おい、お前ら何だよ！」

はい、智貴に殴られてます匠。

（明…これで良いんだよな）

…と、匠からのテレパシー。ここまでハッキリと聞こえるのは小説だからだ。

（ああ、わざと負けるんだ。そうすればありがとう智くん…ってなるはずだ。それに智貴は喧嘩弱いから、大丈夫だ！）

俺もテレパシーで返事する。

（ハハ…でも、ちょっと痛いや…）

殴られ続ける匠。

でもなぜかその顔は人のために働けて幸せそうだった。

（明…もついいだろう？そろそろ止めてくれよ）

（いや、まだ早い）

ひたすら殴られる匠。

お前こそ本当の親切さんだ。

（明…まだか…！！）

（まだ早い）

さらに殴られる匠。

ぶっちゃけこれが狙いです。

ハーハッハ、まじウケる！

顔ボコボコじゃん君。ツボ！ ツボだよ匠い！！

さて、そろそろ良いだろう。匠も白目で泡ふきはじめたし。

『さ、こんな奴らほっというて行こうぜ』

俺は友美ちゃんの肩を抱き歩き始める。

「…え？ちよつと…」

『あれ？それとも、あんなのが彼氏なの？』

「彼氏なんかじゃ…」

『じゃあ行こうか』

ウヒヨヒヨゝ友美ちゃんの肩はか弱いねえゝ　めっちゃ良いかほりがするよん

「待てやあー！」

何ですかチキンさん。

「俺は友美が好きだ」

…ふう、やつと言ったか。友美ちゃんも顔真っ赤になってるよ。くそ、やっぱり智貴ム力つくな。

『なるほど、負けたよ。行くぞ、そのボコボコになってるボンクラ！』

後は二人で何とかなるだろ。ああゝあ、やつと真面目な話しが終わったよ。

「智くん…一つ聞かせて？何で黙っていなくなっちゃったの？」

「それは…どの言葉も全部、最後はゴメンに繋がりそうだからさ…それじゃ嫌だろ？」

申し訳なさそうに笑う智貴。

「もう…淋しかったんだから」

照れ臭そうに笑いながら抱き着く友美ちゃん。

はっ、お前ら記念日に別れる！

第30話〜30話記念！サターンの前兆〜

しゃああ！　今回は30話記念と言うコトで全員で　チヨメチヨメ
島チヨメパラダイス　ってゆう、まあ用は遊園地みたいなトコに来
たんだよね。

リョータ、匠、友美ちゃん、正美、舞、そしてこの明様で智喜の車
に乗ってきたのだ。留年したとは言え、ちゃっかり車の免許は取っ
てみたいだね。

智則はお留守。ってかぶつちゃけあいつ絡みにくいしキャラ的にい
ただけないし動かしにくいのよね。

「キヤー凄ーいケロ！」

「早く入ろうよ、友美！」

「はい、皆も行きましょう？」

「…はい」

ええ、そりゃ女性陣はテンションも上がるでしょうね。

でもね、まず智喜の車、軽なのよ？　僕らトランクにブツ詰まって
きたんだぜ？

「おーい、行くぞお前らあ〜」

あの野郎は運転手だからって…

まあいい。トランク見たらさぞかし驚くだろう。

「おっと、トランクに入れといたお気に入りのシャツに着替えるかな」

フッフ、三時間ドライブの結晶さ。

「ぬおお〜！誰だ！？俺のシャツに嘔吐物ブチまけやがったのはあ
！」

ハハハーざまあみろ。

センスの古い台詞で悪かったな！

さて、それではボチボチ入園するとするかね。

「行こつ、智くん」

「うう、シャツう〜」

ゲートの前には券売機があり、ナビゲーターに従いチケットを購入しなくてはならない。

いらっしやいませ、カップルで二千円になります

あ、友美ちゃんと智喜が先に行っちゃった…。

フン、まあいいさ。

「ほら、行くわよりヨータ」

「く…車酔いが」

いらっしやいませ、カップルで二千円になります

つつか入園料がカップルってどうゆう事じゃい。

「タクミン、行くケロよぉ」

「お…お…う」

いらっしやいませ、カップルで二千円になります

あれ！？ ストーリー上じゃまだあの二人付き合っていないよね？

そして残された俺と…あれ？ このイケメンに特定のキャラなし！
？ 待て待て、俺一人ってどうゆう事だよ！

遊園地で男一人ってどんだけ…。…泣けてくるぜ。

まあ良い。とにかく入ろう。

いらっしやいませ。サターンの方は58000Zになります

俺サターンか！

ってか何そのゲームみたいな金の単位は！

Z…すなわちズーマです

原チャ！？ ズーマ58000台ってコト？

じゃあ円でも良いんですけど…

じゃあって何だよ。58000円でしょ。…高えよ！

どうせ汚い金だべ？

機械の分際で何こいつ！

荒らす者は高いってか。ハッ、面白い。どうせ汚い金じゃ。くれてやるわい！

……俺、ホントに主人公なのかな？

ようやく入園できたものの、すでに財布はカラッポだぜ
入園料でフリーパスだから遊ぶ分には問題ないさ。 まあ、

休日だけあってアトラクションには結構並んでいるな…。

おっと、先頭グループにリョータと舞発見！

はいはい、ちょっと失礼しますよ。

「ちょ…明！ちゃんと最後尾に並びなさいよ！」

『固い事言つなよ、なあリョータ？』

「あ…ああ」

ん？ 絡みが薄い…そうか！ 今俺らが並んでいるのは地上100メートルから急行落下の絶叫マシンだ。

リョータはウォーターライダーごときでビビる奴だもんね。

ってか、女より男の方が絶叫系ダメだって言う奴が多い気のせいかな？

ちなみに俺大好き。

男は黙って絶叫でしょ、みたいな。

ついに俺達の出番が回ってきて、椅子に腰掛け、安全レバーを下ろす。

あれ？　ちょ…俺の安全レバー緩いつてかカチッて鳴らないんですけど…。

おい、ちよつと待て！　まだ上がるな…レバー！　俺のレバー壊れてるから…！

そして一番上まで到着。はい、僕これから死にます

スリー…

ああ、死へのカウントダウンだ。

トゥー

俺の人生短かったなあ…。

ガコン…！

ざけんなあ…！

安全レバーがない俺は落ちた振動であつという間に外に放り出される。

…って言ってる場合じゃないよ！

ヒヤアアアあアアア！！

落ちる墮ちる墜ちる！！

オチてますよボク！

はい、でも浮きました

だって僕サターンだもん

サターンは空飛べるんだもん

おお！？ マジか！？ 俺飛べたのか！？

…チツ、地上に戻った舞は気絶したりヨータの心配して俺がいない事に気付いてねえや。

もういいもん。

お、今度は観覧車に並んでる智喜と友美ちゃん発見！

ちよっくらサターンしてくっかな

はいはい、ちよっとすいませんね。

『よお 智喜！』

「何だよ明、ちゃんと並べよ！」

「そつですよ！…てゆうか…一緒に乗るんですか？」

あーいたたたた。

そうですね、友美ちゃんは智喜と二人っきりで観覧車に乗りたいんですもんね。サターンなんて邪魔ですよね。

こんな可愛い子にこんな迷惑そうな顔されるとオチサンまいっちゃうよ。

『ハハハ、まさか。二人の邪魔はしないよ。友美ちゃんは二人つきりが良いんだもんね?』

「え…いえ…別にそうゆう意味じゃないですけど…」

『ところで智喜…』

「んあ?」

『この前ナンパした子とどうなった?』

「ハア!? ちょ…ナンパなんてしてねえよ!」

『おいおい、智喜がナンパしたいって言ったんじゃない。お持ち帰りしたの智喜だけだぜ?』

「バツ…何言っただお前!」

「智くん…どうゆう事?」

「誤解だ友美い〜」

ハッハッハッ。

お前ら記念日迎えずに別れる！！

さあゝて、匠達はどこかな？

俺はピヨンと大空に羽ばたいた。

そうです、コメディ―…いや、チョメディ―は何でもありなのです。

お、いたいた。

何だよ、園児が見るような戦体ヒーローショーなんか見てるよ。

ちよつと空から見ようとするかな。

グハハハ、それではチョメマンが来る前に人質を用意しようかな
ゝ？

ステージの上から悪役のオッサンが客席まで降りてきて、人質を探しているようだ。

キヤーとかウワーとか騒いだり、中には泣いちゃう子までいるよ、可愛いね子供は。

よし、人質は貴様にしようかな！

「ア…アチキの事！？」

はい、お約束。人質は匠でした。
つかアチキって何だよ。

ステージまで連れて行かれた匠は凄く恥ずかしそうだった。

皆、大変よ！このお兄ちゃんを助けるために、大きな声でチヨメマンを呼びましょう！せーの…

チヨメマンー！！

会場の子供達が一斉に叫んだ。なんかこうゆうのって純だよな。

今行くぞ！

カッコ多っ！

ってかメツチャいっぱいチヨメマン出てきたんですけど！

うわあ…あれリンチだよ。悪役速攻でやられてんじゃん。

人数が多い方が勝っ！

正義の味方がその決め台詞ダメだろ！

「あ…ありがとーう…チヨメマン…」

匠がお愛想で笑ってあげてます。

でもこれじゃあ面白くありません。彼には本当に死を覚悟する緊張感を味わっていただきましょう。

私はそう考え、気が付くとステージに飛んで行きました

『グアーハッハッ！』

匠を抱え、宙に浮く。

子供達は人が空を飛ぶのを目の前に大喜びだ。

「ママー、あれどうやんの？」

「ワ…ワイヤーアクションよ！」

空気の読めるママさん、ご協力感謝します。

お…おい、こんなの台本にないぞ！？

ってか何で飛んでんだよ…

…ど、どうする？

複数のチョメマンはかなり焦っている。当たり前だ。

『ハッハッハッ。どうするチョメマン。こいつをこの高さから突き落としてくれようか！』

俺はさらに高度を上げた。

「明、何の冗談だよ！」

『いや…なんかノリで飛べるようになったからさ、ノリで盛り上げよう』

「お前ノリで殺す気か！」

「今回ばかりは、あなたがやってる事はノリだけじゃ済まされませんよ、明君」

俺達の前に突如現れたのは、可愛いらしい女の子だった。ツヤのある綺麗な緑色の髪は肩にかかり、透き通るような白い肌、パツチリ二重で瞳の色が赤かった。

俺と同様、浮いている。

『誰！？』

「はじめまして、私の名前はエン・リユーファ。天使です」

天使？ ああ……ついにこの小説もそっち系の話になってしまうのか…。

まあ作者も一般高校生ってだけじゃネタなんてねえよチクショオ！
って嘆いていたし仕方ないか。

「あ、心配ありません。次回で最終話ですから」

『何いいー！！！？？』

最終話〜チヨメデー〜

…あ、どうも前回からサターンの明です。

なんかね、今エン・リユーファって子から説明されただけどね、マジで俺サターンだったんだって。

俺が生まれてすぐに父も母も死んじゃって…なぜか尻尾も角もない俺は人間界に刺客として送られたんだって。

実際、天使も悪魔も、人間と体のしくみは変わらないんだってさ。

でね、俺が浮いてる所、一般の人に見られちゃったから、俺、魔界に帰るらしいよ。

『…で、でもさ何で天使が来るの？普通なら同じサターンが来るんじゃない？』

「サターンとは悪魔の最上級のランクなので、こんな仕事はしません。あなたの両親は名高いサターンでしたので、子孫にあたるあなたもサターンになります」

俺、人間から見たら最悪の存在でした。

「それに、人間界が荒れるのを一番恐れているのが神様です。逆に閻魔様はそれを望んでいます。なので、あなたを魔界に連れ戻します。あなたの始末は、ミカエル様が付けるでしょう」

…と、言うわけらしいっすよ。なんか無理矢理な展開だね。

「それと、私が来た理由はもう一つ。…時間ジャスト、そろそろ変形が…」

ん…なんか尻と頭と背中が痛い…いたたた！ 何だこれ！

「はい、鏡」

『何これ！？』

俺の頭からは角、尻からは尻尾。さらには背中からは羽が生えていた。

「未熟のまま生まれたサターンは18歳になると、その姿の本性を表します。今日はあなたの誕生日です」

あ、今日は俺の誕生日か。小悪魔明ちゃん誕生日

だから男じゃ萌えねえつつうの！

女子高生の格好といい、この小説に、ちよいエロスの魅力もないんか！！

『なあ…絶対戻らなくちゃ…駄目？』

「できるかぎり戻ってほしいです。と、言うのも、その姿になったあなたは、人間の心を失い、悪のサターンの心に戻ります。友達に悪影響です」

『分かったよ。じゃあ、匠。俺…帰らなくちゃいけないみたいだか

らさ
『

匠を地上まで下ろそうとする。

「お…おい！待てよ…！」

『馬鹿…暴れんなよ！本気で落ちるぞ！？』

「確かに考えてみれば、今までのお前の行為はサターンだけどさ！」

悪かったな！

「明は俺の親友じゃねえのかよ！」

……………匠…。

「おい！明！新キャラで俺出しといてもう終わりかよ！ふざけんな…！」

ちょうど絶頂に来た観覧車に乗っていた智喜が、窓から顔を出し叫んでいた。

「明は私がこつちに来て初めてできた友達なの！相談も乗ってくれたじゃん！私と智くんが仲直りできたのも明のおかげだよ？……………だから…行かないでよ…」

ハハハ、ありがとう友美ちゃん。行かないでなんて…智喜さえいなければ最高のラブコメなんだけどな…。

「明あゝ！」

今度はまた地上100メートルの絶叫マシンに乗ってる舞とリョータか。

「あんた何調子こいてんのよ！このまま行ったら撃つわよ！」

あんまりリョータの事、尻にひくなよ。ガキの頃から楽しかったよ。

ハハ…舞が泣くなんて…珍しいじゃん。

「あ…明。俺様が…認めた…友達…なんだぞ…」

リョータったら、さっきは気絶する程ビびってた絶叫マシンなのに。

……無理しやがって。

「さあ、残念ですけどそろそろ…」

『…ああ』

今度こそ匠を地上まで下ろす。

その間、匠は震えていた。

バツカ野郎。今空にいんだぞ？

…雨なんか降らすんじゃないよ。

「明は…いつもウチの事忘れてるケロ…。初登場の時だってクラスメイトなのに知らなかったケロ…。だから…ウチの事…もう忘れないでケロ…」

ハハ、大丈夫。

語尾にケロなんて付ける奴を忘れるかよ…。

ああ、なんか、今日は六つも光った雨が見えるや。

『待たせたな…』

俺達は空高く飛び立った。
皆、ありがとな。楽しかったぜ。

—————。

『なあ、あんた…さっき瞳赤かったよな？何で今は黒いんだ？』

「え？私、赤かった？」

『ああ、メツチャ赤かった』

「い…色々あるのよ！じゃあ私は次の仕事があるから。あんまり天使とサターンが一緒にいるもんじゃないわよ」

…？　なんでこんなに動揺してるんだろ？

「じゃあね！」

『あ！おい！何か落としたぞ！』

「え…？あ…」

リユーファが落としたのは紙切れだった。

ん？　何か書かれている。

NEXT TARGET 日本、809-16 木ノ下 譲

『何これ？』

「次の仕事！あなたには関係ないわ！」

『なあ、俺もそうだったが…あなたってのは止めてくれ。明って名前がある』

「明って呼んでどうなのよ？」

『人間は名前で呼ばれた方が親密度が上がるのさ』

「…フフ、でも、もう人間じゃないし、明って名前じゃないのよ？」

『マジか！？まいったなあ…じゃあ俺の名前って？』

「確か…チヨ・メディーって名前よ」

「何その韓国人みたいな名前！」

「でも…これから人間と話す時は参考にするよ、明」

「おう…ハハハ」

「人間界にいたせいかしら…サターンとは思えない程心が優しい。明がこのまま成長すれば…魔界と天界も争わないですみそうな気がする…」

「何ブツブツ言ってるんだ？」

「別に…ただ…人間って楽しそうだって…」

「おう！人間は楽しいぞ！でも、これから俺が魔界を楽しくするんだ」

―――END。

後書き

どうも、作者のタンポポです。後書きまで読んで下さって、ありがとうございます。

エン・リユーファは『リプレイ』という小説に出した天使ちゃんです。

主人公の譲に会う前の話でした。

明の不良グループ名もリユーファでしたね。なぜかリユーファって言葉を気に入りました。

麻雀をやる人は分かると思いますが、リユーファは中国語で『撥あおき龍』と言う意味です。

さて…チヨメディー、終わっちゃいましたね。

連載を始めたのが去年の夏なので、かれこれ10ヶ月の間、明達は私の中にいました。

ノリだけで書いていたので更新も遅く、ネタもないチヨメディーがここまで続いたのは読者様のおかげだと感謝しています。

…が、さすがに一般高校生という設定だけでは限界でした…。

これも私の力不足という事ですな。

なので、こんな中途半端な終わり方になってしまい、ごめんなさい。
ちなみにキャラの名前を考えるのが苦手な私は、学校のクラスメイ
トの名前を勝手に使ってます（笑

アクセス数は今回で3000を越えました。本当に感謝です。

次回作はちゃんとした初期設定からキチンと決めますので、またご
愛読して下さいたら光栄です。

評価・メッセージを下さった方々、本当に感謝しています。

この小説を読んで一度でも笑ってくださる方がいたら、私はそれだ
けで書いた意味があると言っもんです。

長くなりました。それでは、今まで本当にありがとうございました
！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8141a/>

チョメディー

2010年10月10日01時41分発行